

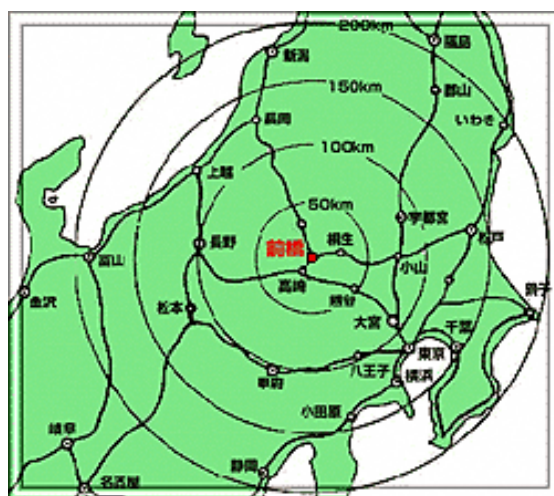
第1章

歴史的風致形成の背景

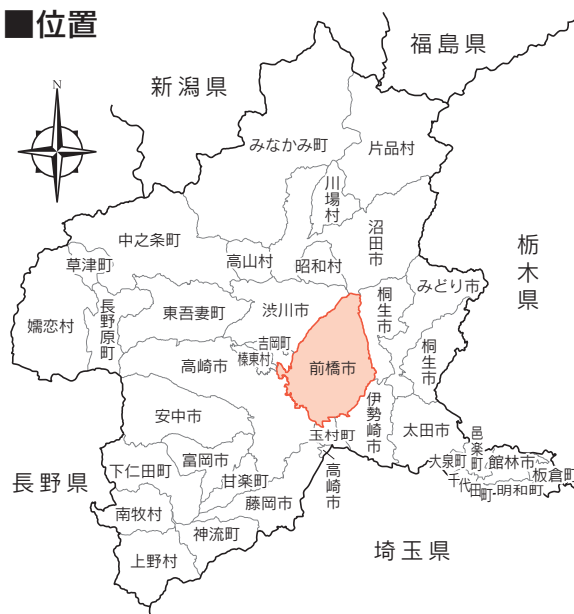
1 自然的環境

(1) 位置

本市は群馬県の中央部よりやや南に位置し、東京から北西約 100 km の地点に位置している。総面積は 311.59 km²で、市制施行当時の明治 25 年 4 月にはわずか 7.71 km²にすぎなかったが、隣接町村の編入・合併により、市発足当時の約 40 倍となった。市域は東西約 20 km、南北約 27 km に及んでおり、群馬県総面積の約 4.9%（県内 7 位）を占めている。隣接市町村には、玉村町、高崎市、伊勢崎市、桐生市、渋川市、沼田市、吉岡町、榛東村がある。



■位置



図：広域図

(2) 地形・地質・気候

①地形・地質

本市の地形や地質はかなり変化に富んでおり、市域の北部は上毛三山¹の一つである赤城山^{あかぎやま}に至り、標高の最も高いところは富士見町赤城山（国有林）の1,823m、最も低いところは下阿内町の64mである。市の中央部から南部にかけては関東平野の平坦地が広がり、市街地を縦断する形で利根川^{とねがわ}が南流している。

利根川の西側及び市街地から南東の地域は標高100m前後の平坦地で、前橋台地と呼ばれている。また、市の北西から南東にかけて帯状に広がる低地帯は、広瀬川低地と呼ばれている。この東は赤城山の南麓斜面にあたる。各地域とも、今から約250万年前の新生代第四紀に形成された堆積物が基盤岩盤の上を厚く覆っている。

前橋台地は、広瀬川低地帯より一段高い台地状の地域である。北西端にあたる部分は榛名山^{はるなさん}の東の裾野にあたり、南東に緩傾斜している。約2万4千年前の浅間山の山体崩壊が原因となって発生した前橋泥流が堆積することにより形成された。台地面はほとんど平坦である。

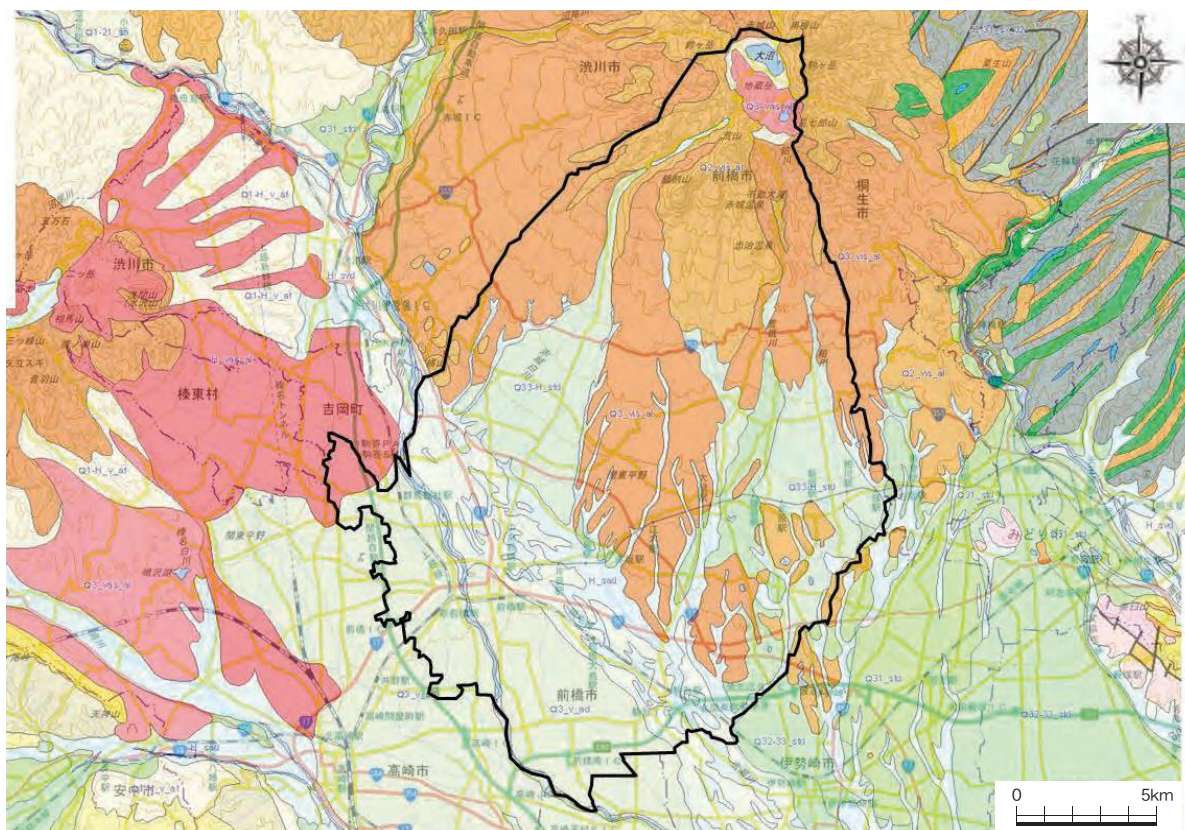
広瀬川低地帯は、赤城山南麓斜面と前橋台地に挟まれた一段低い地域であり、旧利根川の流域にあたる。旧利根川の氾濫原であることから、表土の下位は沖積砂礫^{ちゅうせきされき}（広瀬川砂礫層^{ひろせがわされきそう}）であることが多い。低地帯の面を詳しく見ると、各所に自然堤防や微高地が存在する。

赤城山南麓斜面は、南に緩傾斜する赤城山の裾野である。地質は、更新世のはじめから激しく火山活動した赤城山の火砕岩層からなり、その上に関東ローム層が堆積している。赤城山の山体崩壊によって形成された流山や中小河川によって形成された台地と谷地が多くみられ、台地付近には古くから集落が発達した。



図：地形図

¹ 群馬県を代表する、赤城山・榛名山（群馬県中部）・妙義山（群馬県南西部）の3つの山を指す。



凡例記号	形成時代	大区分	岩相
Q3_vas_al	新生代 第四紀 後期更新世	火成岩	デイサイト・流紋岩溶岩・火砕岩
Q2_vis_al	新生代 第四紀 更新世 チバニアン期	火成岩	安山岩・玄武岩質安山岩 溶岩・火砕岩
Q3_vis_al	新生代 第四紀 後期更新世	火成岩	安山岩・玄武岩質安山岩 溶岩・火砕岩
Q3_v_ad	新生代 第四紀 後期更新世	火成岩	火山岩 岩屑なだれ堆積物
Q32-33_std	新生代 第四紀 後期更新世中期～後期更新世後期	堆積岩	段丘堆積物
H_sad	新生代 第四紀 完新世	堆積岩	谷底平野・山間盆地・河川・海岸平野堆積物
Q33-H_sfd	新生代 第四紀 後期更新世後期～完新世	堆積岩	扇状地・崖錐堆積物

図：地質図

(出典：産総研地質調査総合センター「20万分の1日本シームレス地質図 V2」

(<https://gbank.gsj.jp/seamless/v2/viewer>)) 一部加工)

②水系

市内には、代表的な河川である利根川・広瀬川、赤城山麓の田畑を潤しながら流れる桃ノ木川・粕川・荒砥川をはじめ、歴史的な農業用水である天狗岩用水・群馬用水・大正用水等、大小多数の河川・用水が流れており、豊かな水環境となっている。

これらは、豊かな自然景観を形成するとともに、灌漑用水や発電用水として利用され、市民の生活と密接な関係にある。

ア 利根川

利根川は、古くから坂東太郎と称せられた市内最大級の一級河川である。かつては現在の前橋中心市街地の中央を北西から東南へ流れていたが、その後現在のように市街地の西に変流した。昔は大洪水が度々あり、そのため年々被害があった。

利根川における舟運が本格的に発展したのは江戸時代のことで、年貢米を江戸に運ぶ目的に始まり、近郷近在の商品を大量かつ安価に輸送する手段として利用された。前橋藩においても、年貢米や生糸等の物資を運ぶために利根川の舟運を利用していた。明治時代には、利根・吾妻方面から伐り出された材木の輸送路として重要な役割を果たしていた。

イ 広瀬川

広瀬川は、前橋中心市街地を流れる利根川水系の一級河川である。元々は利根川の本流が流れた河道であったといわれ、古くは比刀根川と呼ばれた。

江戸時代には、農業用水として重要な役割を持っていたほか、前橋城下の生活用水や防火用水として用いられた。前橋領内の年貢米輸送や江戸への城米の回漕のために舟運も行われたが、元禄15年（1702）に一旦中絶、その後は再興運動や通船が度々行われたものの、舟道の確保が難しかったために十分な利用ができなかった。

明治時代以降になると、広瀬川の水力は製糸や撚糸の器械の動力として使われ、沿岸には製糸・撚糸工場が密集するようになり、「生糸のまち」前橋の発展を支えた。

③気象

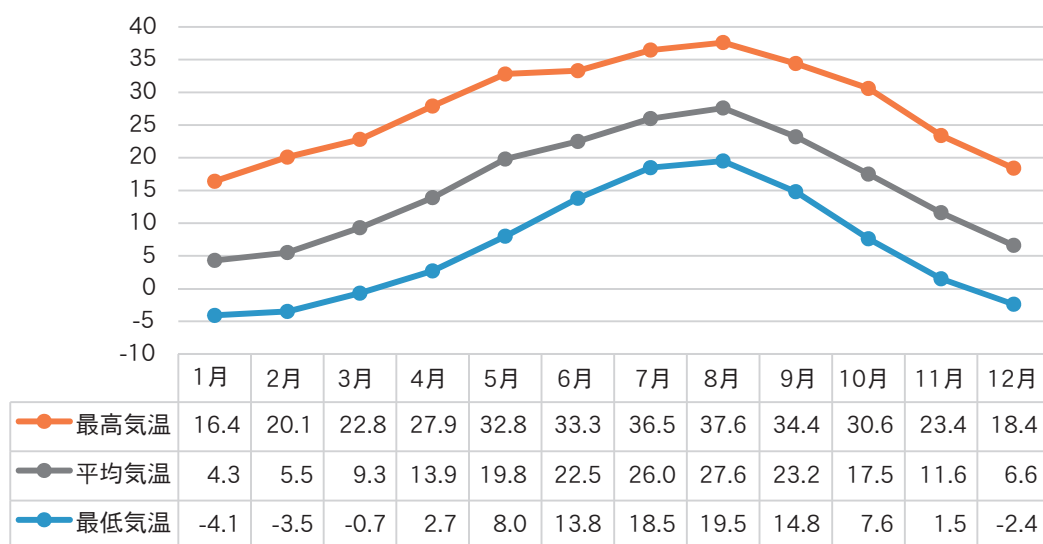
関東平野の最北端に位置し、北西に連なる赤城・榛名の山々に囲まれ、年間降水量は比較的少なく内陸性気候の要素が強い地域である。過去5年間の平均気温は15度程度、年間降水量1,250mmであるが、気温の差は大きいので四季の変化に富んでいる。

例年11月から翌年4月にかけて晴天が多く、雪は比較的少なくなっている。北西の季節風が吹き、特に冬期の風は強く、赤城山で雪となって水分を完全に吐き出した風は乾燥した空気となって平野部に吹き下り、「上州のからっ風^{かぜ}」や「赤城嵐^{おろし}」と呼ばれる。

夏季は、関東平野の南東の風の流入で気温が高く、降水量が多くなる。特に8月は上毛三山から発生する雷雲により雷が多発する。

月別平均気温

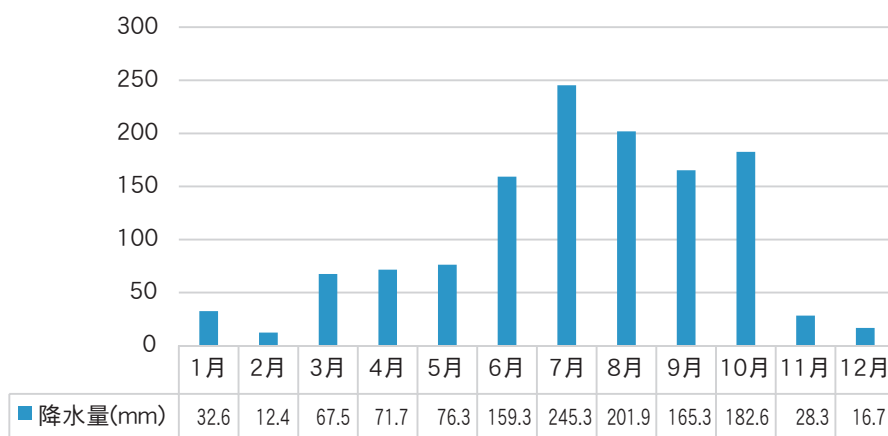
平成28年（2016）～令和3年（2021）



（資料：気象庁）

月別平均降水量

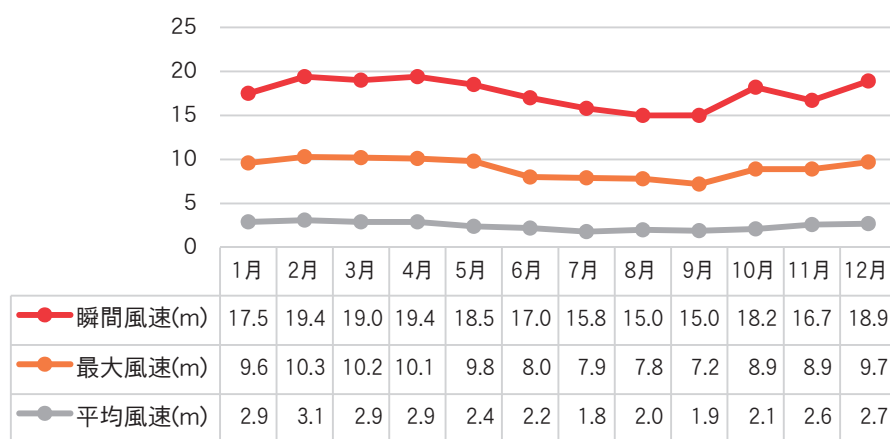
平成28年（2016）～令和3年（2021）



（資料：気象庁）

月別平均風速

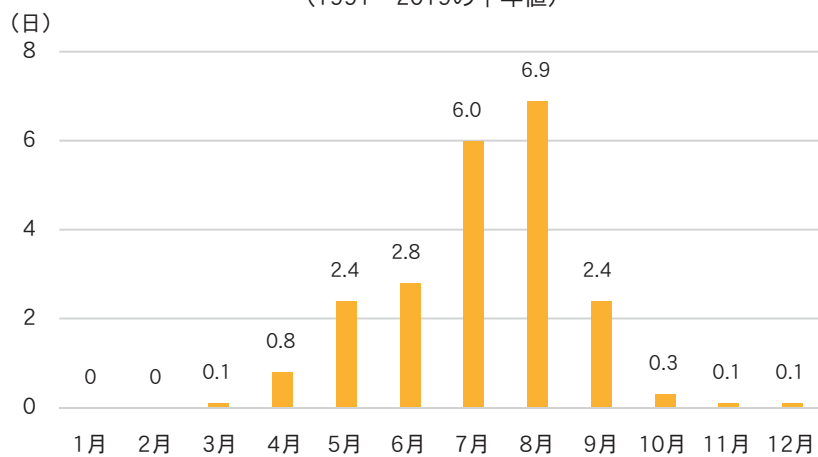
平成28年（2016）～令和3年（2021）



（資料：気象庁）

月ごとの雷日数

（1991～2019の平年値）



（資料：気象庁）

2 社会的環境

(1) 市町村の合併経緯

明治 22 年（1889）町村制施行と同時に、前橋は「東群馬郡前橋町」として発足した。時を同じくして、前橋周辺の各町村はそれぞれ町村制施行による自治体として独立発足した。同 25 年（1892）には県内最初、関東で 4 番目、全国で 41 番目に市制を施行し、前橋市の誕生となった。その後、明治 34 年（1901）上川淵村の 6 大字を、昭和 26 年（1951）桂萱村の大字三俣地区の一部を合併した。

昭和 28 年（1953）町村合併促進法が施行されたことにより、昭和 29 年（1954）には上川淵村、下川淵村、芳賀村、桂萱村、元総社村、東村及び総社町の 7 町村が前橋市に合併した。その後隣接の各町村内でも合併論議が続き、南橋村、清里村、新高尾村、木瀬村、旧上陽村（玉村町）及び城南村が順次合併した。

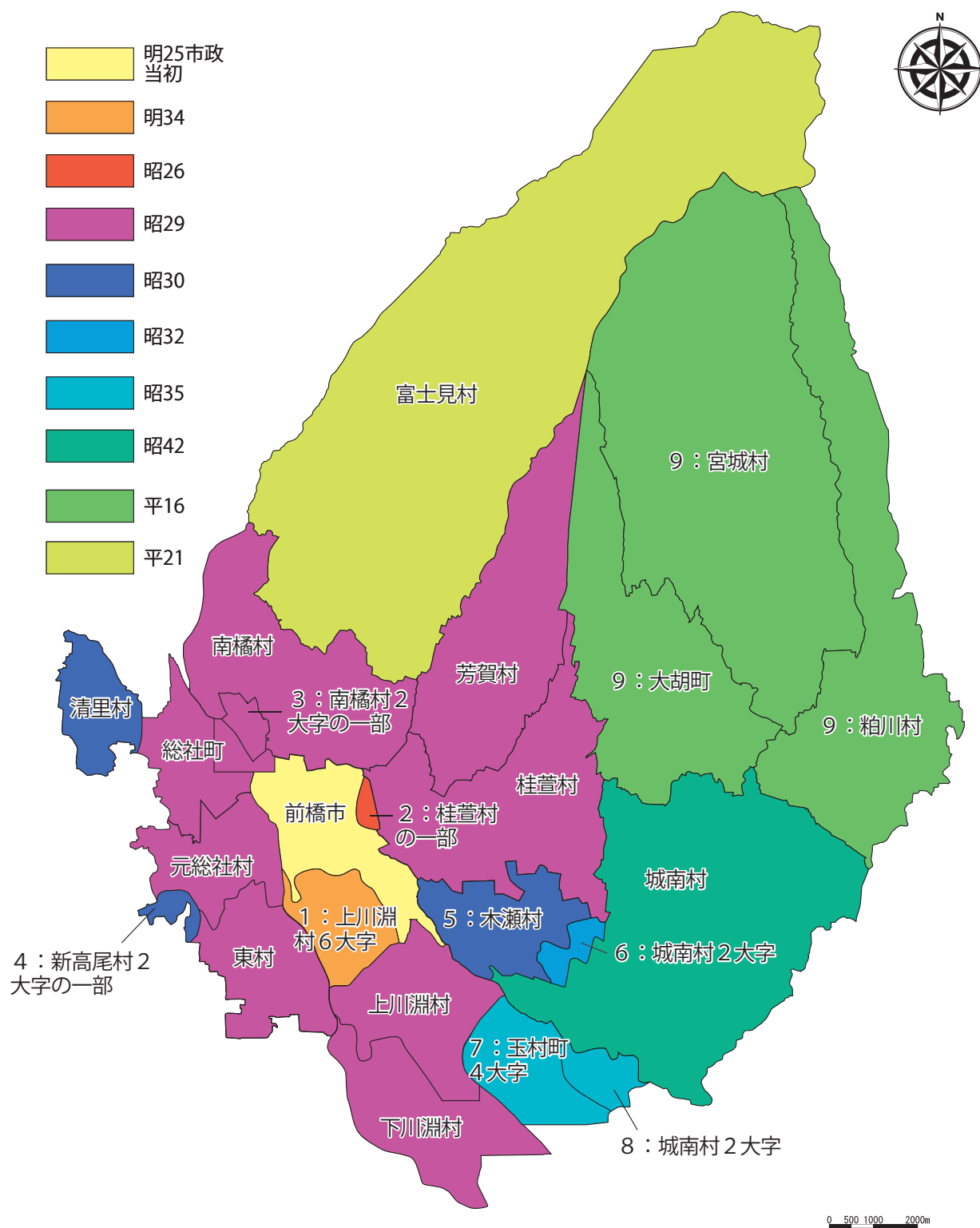
平成 16 年（2004）12 月 5 日には大胡町・宮城村・粕川村と合併し、平成 21 年（2009）5 月 5 日には富士見村と合併した。また、平成 21 年（2009）4 月 1 日には中核市の指定を受けて、新たな前橋市としてのまちづくりがスタートし、令和 4 年（2022）には市制施行 130 周年を迎えた。

年月日	編入地域
M25.4.1	市制施行
M34.4.1	上川淵村 6 大字（六供、前代田、天川原、市之坪、紅雲分、宗甫分）編入
S26.4.1	桂萱村 大字三俣の一部編入
S29.4.1	上川淵村、下川淵村、芳賀村、桂萱村、元総社村、東村及び総社町合併
S29.6.4	南橋村 大字上小出、川原の一部編入
S29.9.1	南橋村合併
S30.1.20	清里村、新高尾村 2 大字の一部編入（鳥羽、中尾字金尾）
S30.4.1	木瀬村の一部編入（天川大島、上大島、野中、上長磯、女屋、東上野）
S32.10.10	城南村 2 大字（下長磯、小島田）編入
S35.4.1	旧上陽村 4 大字（西善、山王、中内、東善）、城南村 2 大字（東駒形、駒形）編入
S42.5.1	城南村合併
H16.12.5	大胡町、宮城村、粕川村合併（都市計画区域の統合はせず）
H21.5.5	富士見村合併（都市計画区域の統合はせず）

明治22.4.1町村制施行による合併後の町村名



市域の変遷図

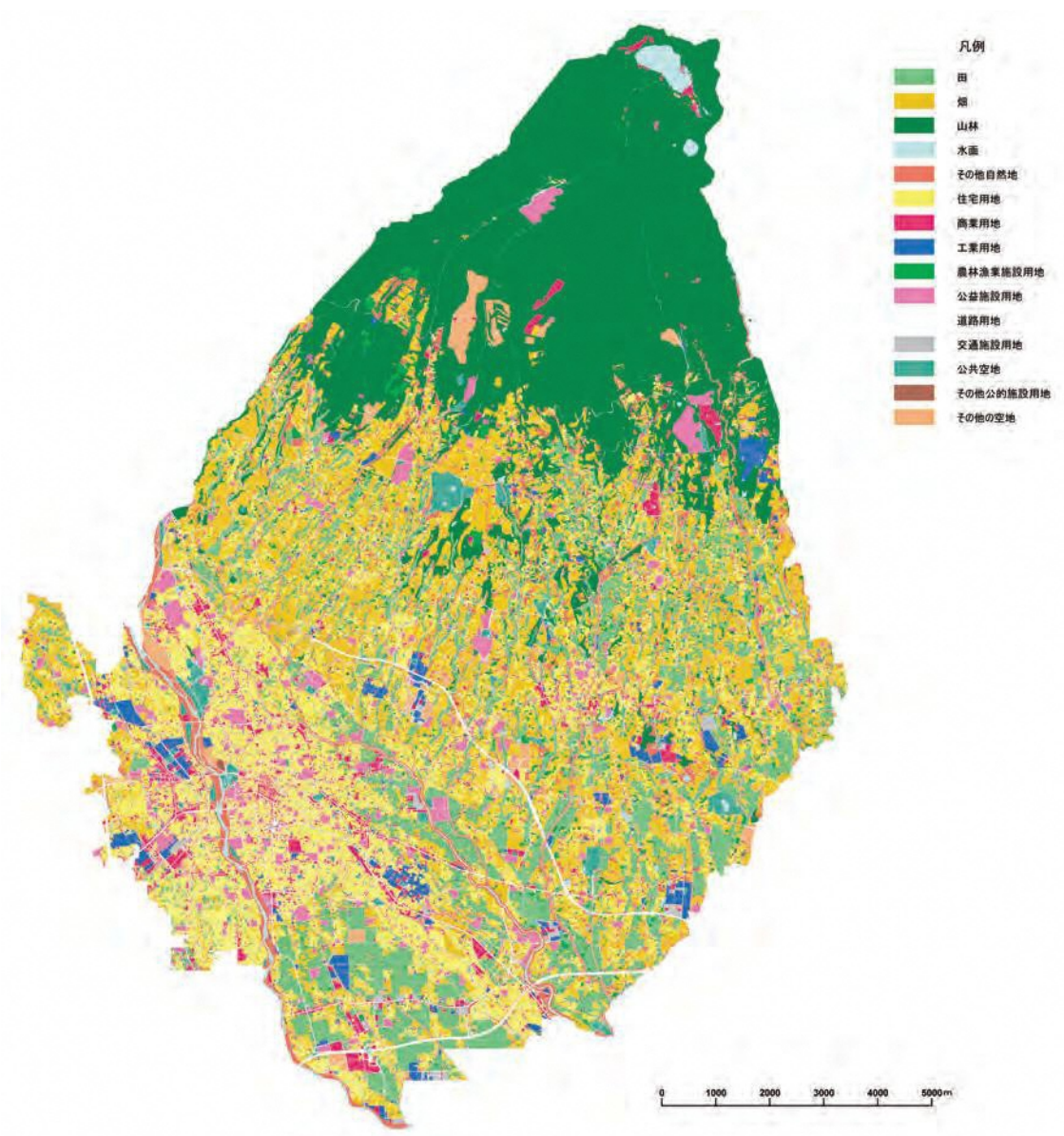


(2) 土地の利用

本市は、雄大な赤城山を背景に緑豊かで広大な市域を有していることから、全市域の約 59%が田や畑、山林といった自然的土地利用となっている。一方、市街地を含む都市的土地利用の割合は約 41%、そのなかでは住宅用地や道路用地の割合が大きい。前橋駅周辺等を中心に建物用地が広がり市街地が形成され、鉄道軸沿いに建物用地が展開している。市街地の周辺は農地として利用され、市域の北部は森林である。赤城山を水源とする河川が市域を貫流しており、河川は自然と市街地をつなぐ骨格となっている。

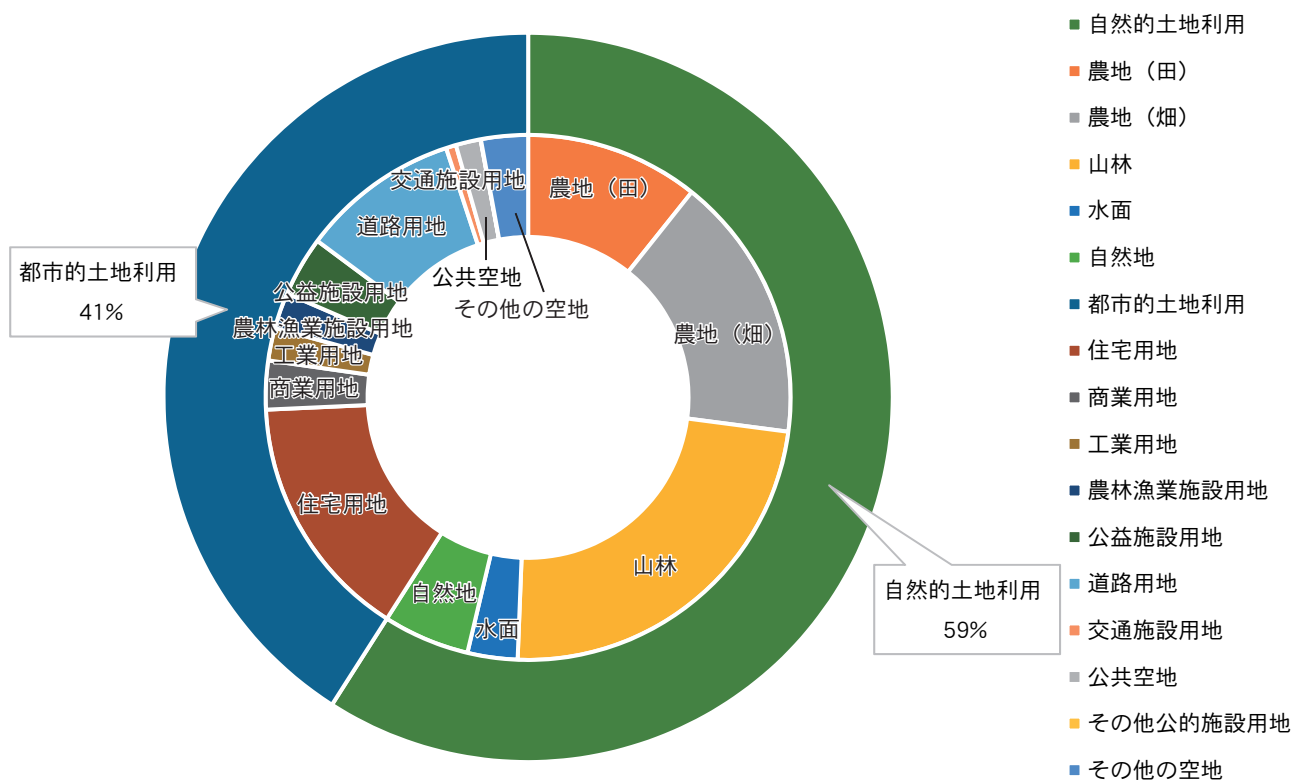
地域別に土地利用を見ると、東部地域では畑を主体に広大な田園が広がっている。反対に、西部地域は本庁管内地区を中心に市街地が広がり、その周辺は宅地と田・畑が混在化している。また、南部地域は、圃場整備された田を主体に利用されているが、駒形バイパス周辺及び北関東自動車道を中心に宅地化が進んでいる。北部の赤城山の頂からは山林が広がり、その南麓の緩やかな傾斜地は畑・牧草地を中心に点在した農地として利用されている。

都市計画区域は、前橋都市計画区域（14,734ha のうち用途地域は 4,979ha）及び前橋勢多都市計画区域（12,740ha のうち用途地域は 547ha）である。



図：土地利用現況

		面積【km ² 】	構成比
自然的土地利用		183.97	59%
農地	田	33.38	11%
	畑	51.03	16%
山林		73.38	24%
水面		9.59	3%
自然地		16.59	5%
都市的土地利用		127.62	41%
住宅用地		47.39	15%
商業用地		9.36	3%
工業用地		6.24	2%
農林漁業施設用地		6.92	2%
公益施設用地		11.48	4%
道路用地		30.48	10%
交通施設用地		1.93	1%
公共空地		4.78	2%
その他公的施設用地		0.04	0%
その他の空地		8.99	3%
合計		311.59	100%



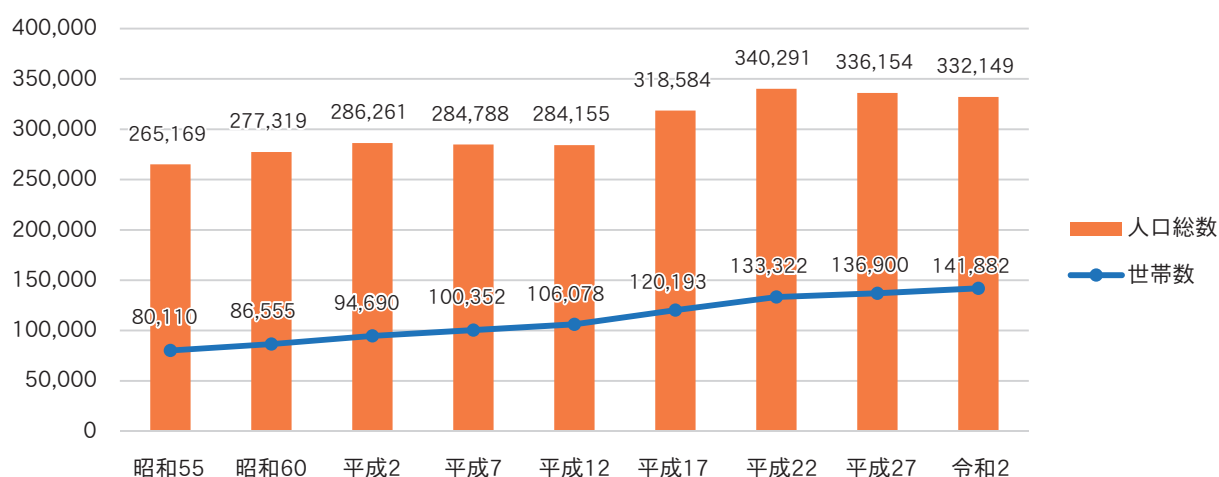
表・グラフ：土地利用の割合

(3) 人口動態

本市の人口は、明治 25 年（1892）の市制施行当時は 31,967 人であったが、令和 3 年（2021）3 月 31 日現在では 334,535 人となり、この 120 年間で約 10 倍に増加しているが、平成 22 年（2010）をピークとして、減少へと転じている。

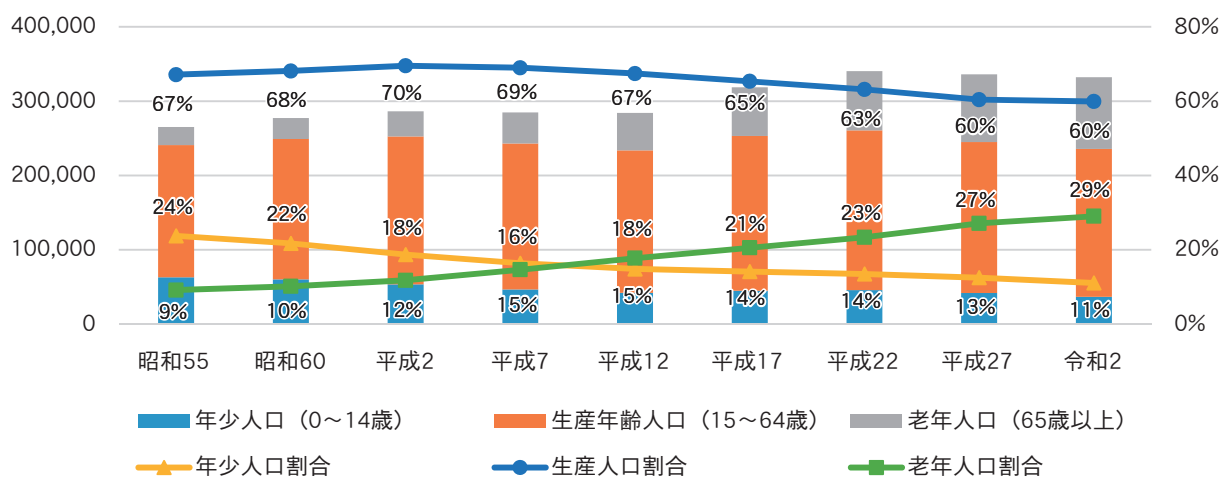
また、年齢 3 区分別人口の推移を見てみると、年少人口（0 歳～14 歳）は昭和 55 年（1980）以降、生産年齢人口（15 歳～64 歳）は平成 7 年（1995）以降減少を続けている一方、老年人口（65 歳以上）は一貫して増加しており、全国的な傾向と同様に少子高齢化が進行している。

人口総数及び世帯数の推移



（資料：国勢調査）

年齢区分別人口の推移



（資料：国勢調査）

区 分	昭和55	昭和60	平成 2	平成 7	平成12	平成17	平成22	平成27	令和 2
人口総数	265,169	277,319	286,261	284,788	284,155	318,584	340,291	336,154	332,149
年少人口（0～14歳）	62,962	60,264	53,581	46,683	42,152	45,018	45,875	41,961	36,764
生産年齢人口（15～64歳）	177,957	188,886	198,969	196,420	191,578	208,125	214,913	203,050	198,995
老年人口（65歳以上）	24,250	28,169	33,711	41,685	50,425	65,441	79,503	91,143	96,390
世 帯 数	80,110	86,555	94,690	100,352	106,078	120,193	133,322	136,900	141,882

(4) 交通機関

①道路網

市内の道路網は、国道 17 号、国道 50 号や国道 17 号上武道路^{じょうぶどうろ}などを骨格として形成されている。また、関越自動車道と北関東自動車道の 2 路線の高速自動車国道が通り、それぞれのインターチェンジが整備されている。本市の一人当たりの保有自動車数は 0.679（平成 29 年（2017）自動車検査情報登録協会 HP より）で、全国平均 0.477 を大きく上回っており、市民の自動車への依存度が高い。

②鉄道網

市西部を縦断する JR 上越線^{じょうえつせん}と、市南部を横断する JR 両毛線^{りょうもうせん}が運行しており、高崎・東京方面へのアクセスが確保されている。前橋駅、新前橋駅は利用者が集中しており、特に本市の玄関口である前橋駅は地域交通の拠点であり、首都圏等の各地と往復するための本市のターミナル駅としての役割を担っている。

また、上毛電鉄上毛線^{じょうもうでんてつじょうもうせん}が市を東西に横断するように運行しており、みどり市・桐生市へのアクセスも可能となっている。

③バス交通

ア 路線バス

前橋駅を中心として、放射方向にバス路線が運行されている。特に前橋駅の駅前通りで複数系統が重なり、高頻度に運行している。新前橋駅では、前橋駅に比べて駅に結節するバス路線数が少なく、市内郊外部から中心部への移動よりも、高崎方面等市域外へのアクセスを支えるネットワーク構造となっている。市内郊外部へは中心部からの放射状のバスネットワークが形成されているが、一部の系統を除き、運行本数が少ないことが課題となっている。

また、前橋駅、新前橋駅を中心に、中心部を循環するコミュニティバス（マイバス）が運行されている。

イ デマンドバス

公共交通不便地域においてはデマンド方式のバスとして、大胡・宮城・粕川地区のふるさとバス、富士見地区のるんるんバス、城南地区の城南あおぞら号が運行されている。

ウ 高速バス

本市と全国の主要都市をつなぐ高速バス網が充実している。本市発着の主なルートとしては、東京方面、北陸方面、名古屋・関西方面、仙台方面のほか、羽田空港、成田空港方面を行き来する路線が運行されている。

④タクシー

市内にはタクシー事業者が 9 社あり、ドア・ツー・ドアの個別輸送が提供され、市内の移動を支える交通手段となっているが、輸送人員は減少傾向にある。

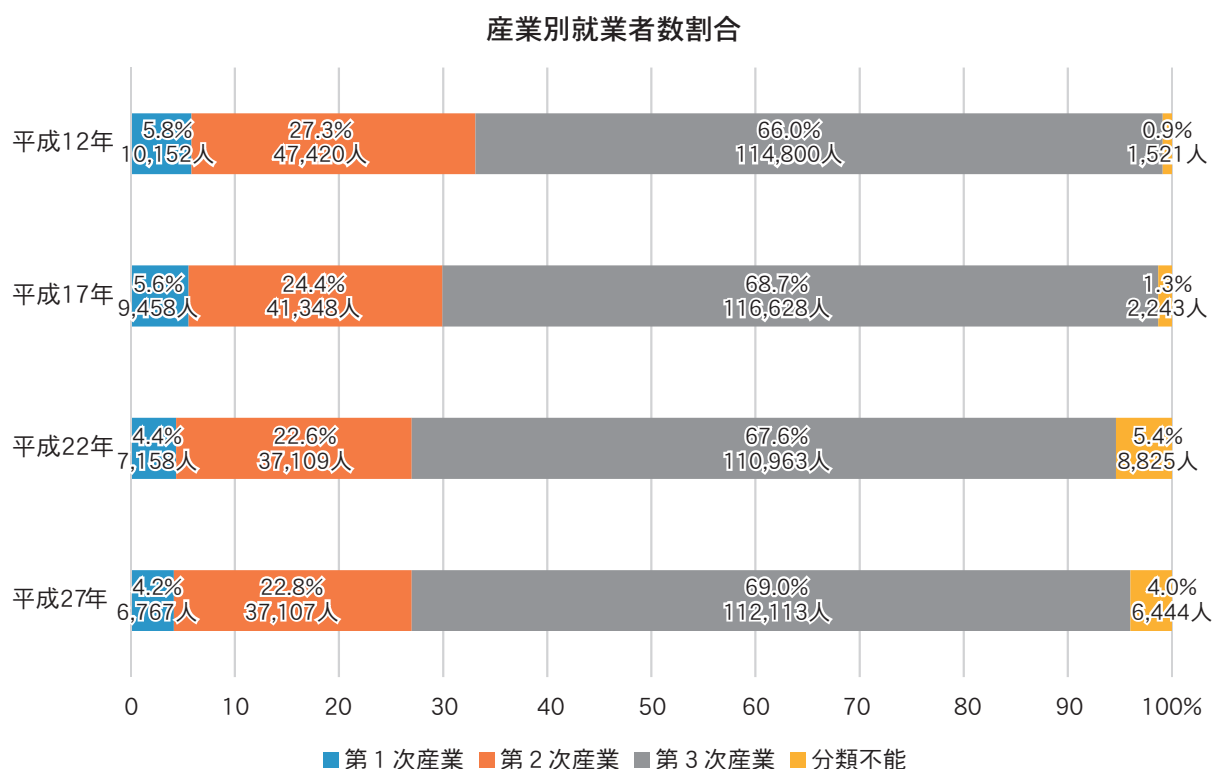
⑤シェアサイクル

This map illustrates the geographical context of Maebashi City. It shows the city's position relative to neighboring municipalities like Maebashi City, Maebashi City, and Maebashi City. The map highlights the city's connectivity via major transportation routes, including National Route 17, National Route 50, and National Route 353. It also identifies key landmarks such as Maebashi City Hall and Maebashi Station. A compass rose and a scale bar (0 to 2000m) are included for orientation and measurement.

²事前登録を行った市民に対してタクシー運賃の一部を市が支援する制度。利用者は、マイタク登録済マイナンバーカードをタクシー運転手に提示することでサービスを受けることができる。

(5) 産業

本市の平成27年(2015)の産業別就業者数は、同年国勢調査によると就業者164,055人のうち、第1次産業が6,767人(構成比4.4%)、第2次産業が37,107人(構成比22.6%)、第3次産業が112,113人(構成比67.6%)となっている。平成12年(2000)に比べると、第1次産業及び第2次産業の比率が減少しており、第3次産業の比率が増加している。



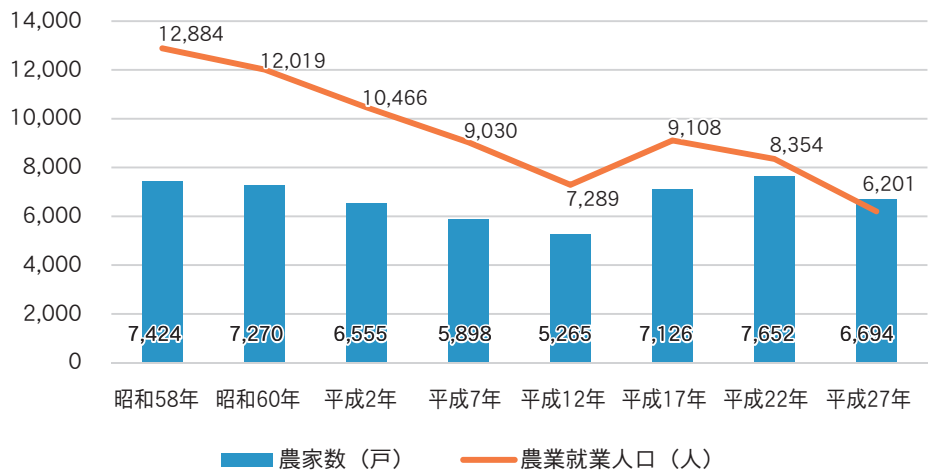
(資料：国勢調査)

※平成12年は旧前橋市・旧富士見村・旧大胡町・旧宮城村・旧粕川村の合計
平成17年は旧前橋市・旧富士見村の合計

①農業

本市の農業は、赤城南麓及び榛名東麓の立地条件を生かすとともに、利根川水系の比較的恵まれた水利を活用して、古くから米麦・養蚕が基幹作目として営まれてきた。農家戸数と農業就業人口は減少傾向にあるが、本市は全国でも有数の農業生産額を誇る農業都市で、農林水産統計(平成30年度)によると、農業算出額は県内1位、全国15位となっている。中でも、野菜ではきゅうりやなす、果物では梨、花卉ではバラの生産量が全国トップクラスである。また、赤城山麓で広く営まれる畜産業に強みを持っており、本市全体の農業産出額のうち3分の2を占める。特に豚は、全国8位の産出額を誇っている。

農家戸数と農業就業人口の推移



(H29前橋市統計書より作成)

②工業

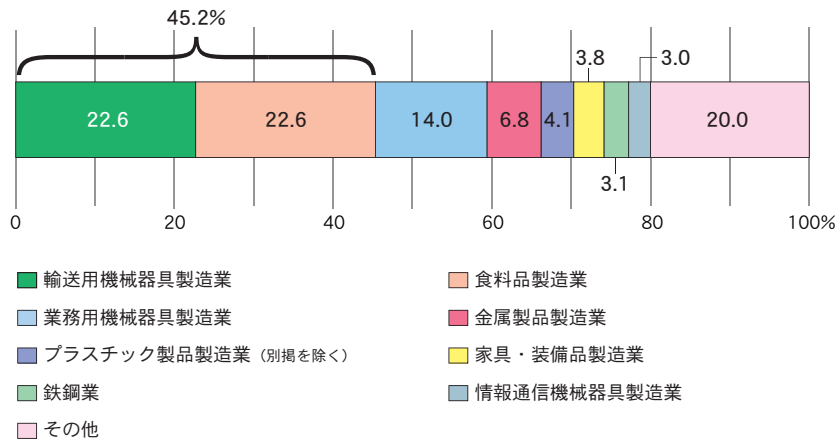
本市では、積極的に造成された工業団地に多くの優良企業を誘致してきた。製造品出荷額等をみると、食料品製造業、輸送用機械器具製造業が全体の約 45%を占めている。特に食料品製造業は、事業所数の 14.5%、従業者数の 24.6%を占め、本市の工業における基幹的産業となっている。

■図表：製造業におけるシェア順位

事業所数			従業者数		
順位	業 種	構成比	順位	業 種	構成比
1	食料品製造業	14.5%	1	食料品製造業	24.6%
2	金属製品製造業	11.5%	2	輸送用機械器具製造業	12.1%
3	家具・装備品製造業	9.8%	3	業務用機械器具製造業	9.4%
4	印刷・同関連業	8.3%	4	金属製品製造業	9.1%
5	その他の製造業	8.1%	5	プラスチック製品製造業(別掲を除く)	5.4%

出典：「平成28年経済センサス」総務省、経済産業省より作成

■図表：製品出荷額（業種別割合）



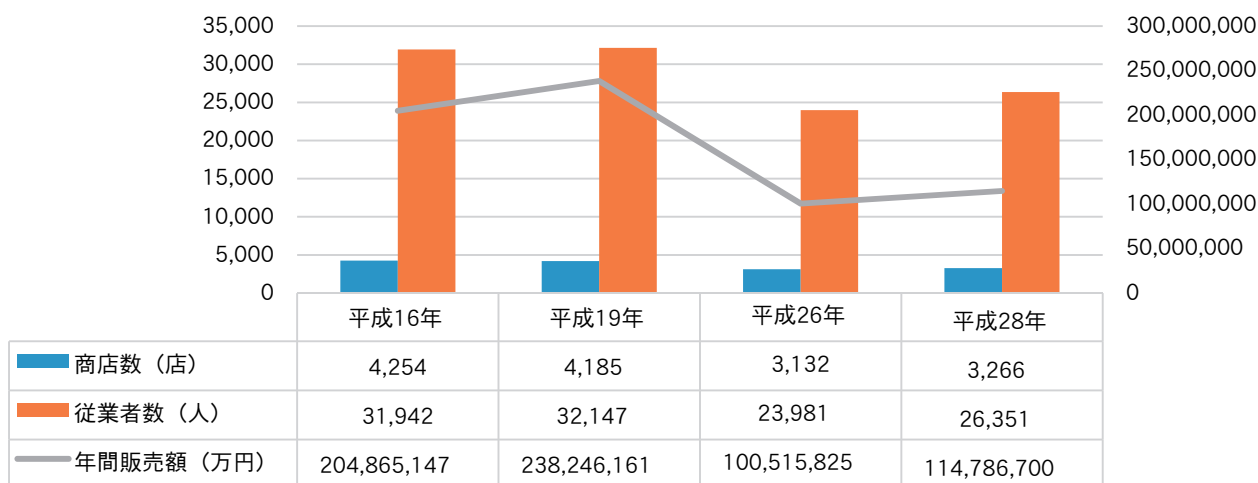
出典：「平成 28 年経済センサス」総務省、経済産業省より作成

③商業

平成 29 年（2017）前橋市統計書（平成 26 年（2014）まで商業統計、平成 28 年（2016）は経済センサス）によると、本市の商業規模は、商店数 3,266 店、従業者数 26,351 人、年間販売額 1 兆 1,478 億 6,700 万円となっており、県内においては高崎市に次ぐ第 2 位の規模である。推移をみると、平成 16 年（2004）から平成 28 年（2016）にかけて、事業所数が 23.2%減、従業者数が 17.5%減、年間商品販売額が 43.9%減となっているが、これは大手企業本社の転出によるところが大きい。

中心市街地には 14 の商店街が集積しているが、過去に立地していた複数の百貨店・大型店が約 30 年の間に相次ぎ閉店又は撤退している。商業規模の減少傾向は全国の他都市と同様で、自動車利用を前提とした郊外型消費行動の定着や、少子高齢化による消費行動そのものの縮小傾向等により、年間商品販売額は大幅な落ち込みを示している。

商業規模の推移



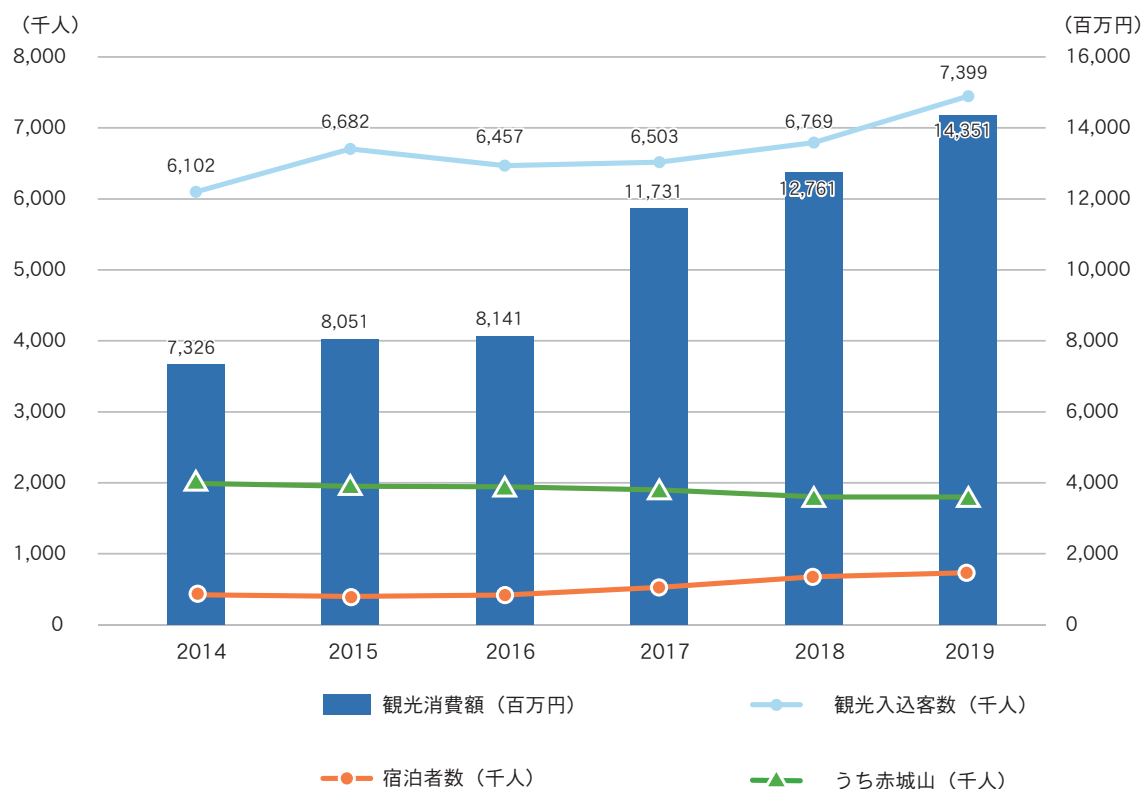
（平成29年前橋市統計書より作成）

（6）観光

豊かな自然にあふれ、秋原朔太郎^{はぎわらさくたろう}をはじめ多くの詩人を育んだ本市は「水と緑と詩のまち」と謳^{うた}われている。主要な観光スポットである赤城山は日本百名山にも数えられ、四季を通じてハイキングや登山、アウトドア活動を目的とした観光客が訪れる。

平成 26 年（2014）の群馬県観光客数・消費額調査で観光客入込数をみると、前橋市は 610 万人と群馬県内で最も多く、富岡製糸場を抱える富岡市（315 万人）や草津温泉を抱える草津町（281 万人）、都市交流人口が多い高崎市（529 万人）よりも多くの集客がある。一方、観光客総計のうち宿泊者については 25 万人と県内 8 位で、主要な温泉宿泊地や高崎市よりも低い数値となっている。また、宿泊観光客が少ないことなどから、本市の観光消費額は低くなっている。

近年では、平成25年（2013）秋にアーツ前橋が開館し、芸術文化活動の支援・振興を担う施設として新たな期待が寄せられているほか、平成27年（2015）には大河ドラマ「花燃ゆ」で群馬県（第二次）の初代県令楢取素彦^{かとりもとひこ}とその妻・文^{ふみ}が取り上げられ、前橋も舞台となった。このような背景から、歴史・文化を生かした観光に対する関心が高まっている。



出典：群馬県観光入込客統計調査報告書
資料：第七次総合計画改訂版

群馬県内の観光入込客数（2014年）

前橋市	6,102,100 人
高崎市	5,193,700 人
渋川市	4,556,700 人
富岡市	3,149,500 人
草津町	2,809,300 人

群馬県内の宿泊者数（観光客数消費額調査2014年）

前橋市	251,900 人
高崎市	663,200 人
渋川市	1,164,600 人
中之条町	287,800 人
草津町	1,796,000 人
嬬恋村	847,499 人
片品村	410,500 人
みなかみ町	1,126,600 人

主な観光施設・イベントの入込客数（群馬県観光客数・消費額調査2014年）

観光地・観光施設等

赤城山	574,000 人
フラワーパーク	274,500 人
クローネンベルク	185,000 人
道の駅大胡ぐりんふらわー牧場	300,700 人
赤城南面千本桜	122,700 人
赤城温泉郷	17,900 人
あいのやまの湯	276,500 人
富士見温泉	210,500 人
粕川元気ランド	175,400 人
前橋文学館	25,600 人
児童文化センター	428,200 人
るなばあく	402,000 人
臨江閣	26,600 人
敷島公園ばら園	416,000 人

各種イベント・祭り

前橋七夕まつり	200,000 人
前橋花火大会	70,000 人
前橋まつり	200,000 人
前橋初市まつり	70,000 人

資料：前橋観光の方向性

3 歴史的環境

(1) 歴史

①原始から古代

ア 旧石器時代から弥生時代

本市における人々の営みは約 3 万年前の旧石器時代に遡ることができる。赤城山南麓地帯にある宮城地区、大胡地区をはじめ、内堀遺跡（西大室町）、柳久保遺跡群（荒口町・荒子町）、熊の穴Ⅱ遺跡（西大室町）において石器等が出土している。内堀遺跡の旧石器は長野県和田峠産の黒曜石を用いたものであったり、柳久保遺跡群・頭無遺跡や鳥取福蔵寺遺跡（鳥取町）で出土された細石器はシベリア方面から伝播した文化と考えられたりと、すでに大規模な文化交流があったことが伺える。

縄文時代の遺跡地は赤城山麓地帯に集中しており、中期・後期の遺跡が多く発見されている。草創期・早期の土器は、端気遺跡群（端気町）や小島田八日市遺跡（小島田町）、徳丸仲田遺跡（徳丸町）で出土され、前期になると芳賀団地遺跡群（嶺町・鳥取町・勝沢町・小坂子町）、川白田遺跡（小坂子町）などで竪穴住居が発見されている。中期の遺跡としては、芳賀団地遺跡群や荒砥二之堰遺跡（飯土井町）があり、後期・晩期には小神明遺跡群（小神明町）や大道遺跡（下大屋町）などがある。徳丸仲田遺跡は、これまで遺跡はないと考えられていた地域であり、今後さらなる発見が期待される。紀元前 3 世紀頃には縄文時代から弥生時代に入り、小神明遺跡群（小神明町）や端気遺跡群（端気町）で竪穴住居や墓が発見されている。清里庚申塚遺跡（上青梨子町）や北三木堂遺跡（今井町）もこの時代のものであり、清里庚申塚遺跡には環濠集落があったことが分かっている。

イ 古墳時代から古代

昭和 10 年（1935）から開始された県下一斉の古墳調査の結果をまとめた『上毛古墳総覧』によると、県内で 8,423 基が、市内では 890 基の古墳が確認されている。平成 24 年（2012）から平成 27 年（2015）の 5 か年にわたり実施された「群馬県古墳総合調査」では、県内 13,249 基（現存 2,423 基）、市内 1,542 基（現存 139 基）の確認がなされ、群馬県は東日本随一の大国であったことから、現存数は少ないものの多くの古墳が築造されたことが伺える。

本市における古墳時代の始まりは、利根川流域に石田川式土器を伴う文化が入ってきた 4 世紀に遡ることができる。4 世紀前半と推定される前橋天神山古墳（広瀬町・県指定の史跡）は東日本最古級の前方後円墳であり、ヤマト王権とのつながりの証である「三角縁神獣鏡」（国指定の重要文化財）が出土していることから、東日本屈指の豪族が眠っていると考えられる。また、墳頂には石田川式土器が並べられており、新しい文化をもたらした人々との関わりを示している。この古墳と東日本最大とされる前方後方墳の八幡山古墳（4 世紀初頭・国指定の史跡）がある旧利根川流域にあたる広瀬河岸段丘上には、県内最大級の古墳群である朝倉・広瀬古墳群を形成し、天川二



前橋天神山古墳
（県指定の史跡）



三角縁神獣鏡
（国指定の重要文化財）



八幡山古墳
（国指定の史跡）

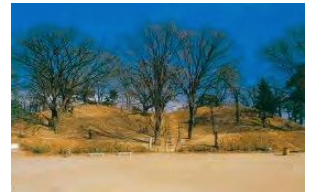
子山古墳（国指定の史跡）、金冠塚古墳（市指定の史跡）、不二山古墳（市指定の史跡）など大小の古墳が数多く存在していた。また、6世紀後半に築造された天川二子山古墳は上毛野氏の一族とされる朝倉君の本拠地と推定されている。

赤城山南麓地域の古墳は5世紀後半より盛んに造られ、粕川流域、荒砥川流域に大型墳が出現している。今井神社古墳（今井町・市指定の史跡）は5世紀後半に荒砥川沿いに造られた前方後円墳であり、その後も円墳が散在していることから、この地域が豊かな水田地帯であったことがわかる。また、この時期から6世紀末にかけて特色のある人物埴輪・器材埴輪が出土しており、その一例として「埴輪・踊る男子像」（市指定の重要文化財）がある。

6世紀に入ると横穴式石室への移行という古墳の造りに変化が生じ、平野部を中心として全長70mから100mほどの前方後円墳が距離を置いて造られるようになる。特に荒砥川流域の大室古墳群は全体10基以上の古墳が集中しており、県内でも早くに横穴式石室を導入したことで注目される。

大規模な前方後円墳に代表される6世紀が終わり、7世紀には小規模な円墳が散在するようになる。その中で、総社地域には愛宕山古墳・宝塔山古墳（国指定の史跡）・蛇穴山古墳（国指定の史跡）の大型方墳3基が時を空けずに築造されている。この地域周辺の大型古墳は遠見山古墳（5世紀末・市指定の史跡）、王山古墳（6世紀初頭・市指定の史跡）、総社二子山古墳（6世紀後半・国指定の史跡）と前方後円墳の後、県内最後の大型方墳である蛇穴山古墳まで連綿と造られており、これらをまとめて「総社古墳群」と称している。大型方墳は、墳丘規模および形状、家形石棺の安置、漆喰の塗布など県内のほかの古墳とは一線を画したつくりを持っている。

宝塔山古墳、蛇穴山古墳の築造と併行して造営事業が進められた山王廃寺は、古墳群の南西約1kmに位置しており、7世紀後半創建と推定され、11世紀前後まで存続したと考えられる。寺域からは全国で3体しか発見されていない「石製鵲尾」、東西3m南北2.5mの塔心礎を持つ「山王塔跡」、塔の心柱を飾る「上野国山王廃寺塔心柱根巻石」（総社町・国指定の重要文化財）、塑像群（県指定の重要文化財）、緑釉陶器などが見つっている。また、寺の正式名称については、調査で発見された「放光寺銘瓦」から、山上碑（高崎市）や『上野国交替実録帳』に見られる「放光寺」と推定される。また、宝塔山古墳、蛇穴山古墳にみられる高度な加工技術と共通性が指摘されており、当時のこの地にはこのような技術はなかったと考えられていることから、大和朝廷と密接に関係のある豪族の氏寺、すなわち上毛野君ではないかと言われている。



（天川）二子山古墳
（国指定の史跡）



金冠塚古墳
（市指定の史跡）



今井神社古墳
（市指定の史跡）



王山古墳
（市指定の史跡）



塑像群
（県指定の重要文化財）

山王廃寺が創建された頃の大化^{たいか}2年（646）に「改新の詔」が出され、律令制度が整えられる。中央政府は全国を60余りの国に区分し、それぞれを大国、上国、中国、下国と4等級の格付けを行った。上野国^{こうずけのくに}は最上位の大国であり、地方支配の拠点である国府の建設がすすめられた中でも、大規模な国府であったと想定される。その国府の位置は、『倭名類聚鈔』(和名抄)の群馬郡の記述から、上野国府は現在の元総社町の総社神社を含む一体だと考えられてきたが、明確な発見には至っていない。しかし、近年の調査により、牛池川^{うしいけがわ}の低地から人形の呪符や「国厨^{くにのくりや}」、「曹司^{そうし}」と書かれた墨書土器^{ぼくしょどき}が見つかり、鳥羽遺跡^{とりば}から国府の神社跡が発見された。官衙^{かんが}関連と推定される建物跡などの発見も続いており、この周辺に国府が置かれていたと推定される。

また、7世紀後半に全国は畿内と七道という8つに区分された。そのうちの東山道^{とうさんどう}の東路^{あきみち}が上野国（群馬県）を通っており、群馬県庁付近は群馬駅家の想定地であった。駅路は下野国^{しもつけのくに}（栃木県）に向かう道と武蔵国^{むさしのくに}（埼玉県、東京都、神奈川県北東部）に向かう道の2つに分かれるが、この道を通して畿内から蝦夷統治に向かったと考えられる。

聖武天皇の時代に入ると、疫病、災害や反乱などにより社会的不安が高まっていた。そのため、聖武天皇は仏教の力で混乱を治めようとして「国分寺建立の詔」（741）を出し、上野国においても建立が進められた。天平勝宝元年^{てんぴょうしょうほう}（749）には勢多郡司上毛野朝臣足人^{せたぐみつかのあそんたるひと}が国分寺建立に功績があったとして外従五位下^{げじゅうごいのげ}を与えられていることから、国分寺建立がほぼ終わったことが伺える。約9年での完成は全国でも早い部類に入り、国分寺に建てられた七重塔は60mを超える全国でも最大級の高さを誇った。上野国分寺跡（元総社町、高崎市群馬町）は昭和及び平成の調査から、伽藍配置が明らかになっており、往時の様子を偲ぶことができる。

律令国家は10世紀になると崩壊の兆しをみせはじめ、上野国では嘉保2年^{かほう}（1095）に1年の調庸雑物（税）が免除になるほど疲弊していたところに、天仁元年^{てんにん}（1108）、大治3年^{だいじ}（1128）の二度にわたる浅間山の大噴火が発生。大量の火山灰が降りそそぎ田畑が埋没するも、復旧されることなく放棄されており、上野国の荒廃を決定付けた。その土地を復興して多くの荘園が造られる中、用水路として女堀^{おんなぼり}（富田町・二之宮町・飯土井町など・国指定の史跡）が計画され、工事が進んだ。未完成に終わったものの、上泉町の旧利根川から引水し、伊勢崎市国定町^{くにさだまち}（旧佐波郡東村西国定^{まわぐんあずまむらにしくにさだ}）までの約13kmをつなぐ壮大な計画であり、高い土木工事技術を有していたことが分かる。

②中世

12世紀以降、荘園が増加してくるにつれて国司政治、律令体制は衰退していき、武士が急成長していく。本市では、平将門の乱（939）を平定した藤原秀郷^{ふじわらのひでさと}の流れをくむ兼行^{かねゆき}が淵名氏^{ふちな}として淵名に拠点をもち、淵名氏から大胡氏^{おおご}、大室氏^{おおむろ}、山上氏^{やまがみ}、那波氏^{なな}などがうまれた。大胡氏は鎌倉時代に成立した軍記物語の中で、上野武士を記載する場合に登場する代表的な一族である。たとえば、『平治物語』巻第一（平治元年^{へいじ}（1159））では「…上野国には大胡・大室・大類太郎…」、『義経紀』では「…上野国には大胡太郎、山上さゑより小太郎重房…」などと表記されており、大胡氏の名は赤城南麓在地領主の筆頭に挙げられるほどに、中央知識層に深く印象付けられている様子が伺える。大胡氏の勢力圏内を「大胡郷^{おおご郷}」と呼ぶが、大胡郷は、旧市域の東北部の幸塚^{こうづか}、三俣^{みつまた}から上泉^{かみいづみ}、片貝^{かたかい}、野中^{のなか}、小屋原^{こやばら}と続く旧利根川の河道低地を底辺とし、これに直交するように、赤城南麓（中腹）の大胡町付近から荒砥川水系に沿った水田地帯、及び市内の荻窪^{おぎくぼ}、江木^{えぎ}、上泉などを含む広大な地域と考えられる。荒砥川流域に基盤

をつくった後、利根川旧河道の開発あるいは再開発を行い、発展をとげていったと思われる。大胡氏は鎌倉幕府成立の時点で、將軍頼朝の御家人となった大胡太郎重俊の子孫ということで、「大胡太郎跡」として幕府に把握され、御家人として活躍した。また、大胡氏はいち早く浄土宗の開祖源空（法然上人）の教えを受けたので、その影響は大胡郷一円に及んだと考えられる。

元弘3年（1333）に新田義貞が鎌倉を攻めたことを契機に、上野国の守護に上杉憲房が任命され、長尾氏が守護代となる。長尾氏は総社・白井・鎌倉・越後などに分派し、関東管領の上杉氏に代わって実質的な支配を行っていた。総社長尾氏は総社に居住し、国府跡地である地に広大な蒼海城を築いた。しかし、永禄3年（1560）に長尾輝虎（上杉謙信）が、関東進出のために厩橋城（のちの前橋城）を制圧したことにより、本格的に戦国時代へと突入する。上野国は小田原北条氏、甲斐武田氏との間で三つ巴の争いとなり、特に厩橋城は交通の要衝として熾烈な争いが繰り返された。長尾氏を厩橋城から退去させた上杉謙信は、北条高広を常駐させ、関東経営の基軸に据えた。その後も北条氏は小田原北条氏との関係を深め、天正10年（1582）に滝川一益が入城するまで在城し続けた。

このような戦乱の時期に、人々は信仰によって救いを求めている。たとえば、赤城山南麓には、法華經供養のために建立された「赤城塔」と呼ばれる多宝塔が多くあり、南北朝から室町時代にかけて造られた。また、末法思想も浸透し、阿弥陀如来の信仰が急速に普及したため、板石塔婆（板碑）や阿弥陀三尊の像や種子（梵字）を刻んだものが多く建てられている。例として、鉄造阿弥陀如来坐像（端気町・国指定の重要文化財）などの仏像や、阿弥陀三尊画像板碑（公田町・市指定の重要文化財）などが挙げられる。



鉄造阿弥陀如来坐像（国指定の重要文化財）



阿弥陀三尊画像板碑（市指定の重要文化財）

③近世

ア 大胡藩

天正18年（1590）、牧野康成が大胡城主となり2万石の領地を与えられ、大胡城の近世城郭整備が始まる。本丸・二の丸・三の丸の東南部低地が根古屋といわれ、最初の城下町であった。ここから南方に近世の町立てが行われ城下町が形成された。城下町整備として風呂川の水を取り入れた虎ヶ堰用水を設け、生活と防水の用水としており、この用水は二の丸と三の曲輪の間にも取り込まれていた。こうした町並みは『前橋風土記』に記されており、現在と相違ないことがわかる。また、牧野氏は開墾事業も行っており、慶長2年（1597）に江木村（現江木町）の荒地開発を快乗院に請け負わせている。その後、元和2年（1616）に牧野氏が越後に転封となると前橋城酒井氏の領地となり、城代が置かれ支配されたが、後に取り壊され、大胡城は廃城となった。

イ 総社藩

戦国末の動乱後の天正18年（1590）、家康の関東入国と同時に信濃の豪族諏訪氏が総社の地に入封し、総社藩が成立した。諏訪氏は頼忠と頼水の2代にわたり、慶長6年（1601）までの11年間、蒼海城（元総社町）をその居城とした。

慶長6年(1601)に諏訪氏が本領諏訪に帰城すると、秋元長朝^{あきもとながとも}が入替わって総社領に入ってきた。秋元氏の総社入封は、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの際に、徳川家康の軍使として会津の上杉景勝^{うえずぎかげかつ}の関東進攻を中止させた功績による。長朝にとっては、父景朝^{かげとも}以来のゆかりの土地で、古くから上野の中心地となっていた総社の地を希望していたことから、永年の宿願が果たせたともいえる。

長朝が蒼海城に入城した当時、この城は相当に荒廃していたことから、父景朝の眠る植野勝山^{うえの かつやま}の地に新城を築くことを考えた。秋元氏の総社城の築城は慶長6年(1601)の所替えの後間もなく始められ、この地方の地侍や有力農民を督励して城と共に城下町を形成した。こうして出来上がった城下を「総社」、古来の総社の地を「元総社^{もとそうじゃ}」とした。

さらに長朝は農民のため、領地内に利根川の水を引くことを計画した。用水路の開削は困難が予想されたが、領主自らが先頭に立ち、農民総出動で難工事に取り掛かった。工事に伴う天狗来助^{てんぐ らいすけ}の伝説から「天狗岩用水^{てんぐ いわようすい}」と呼ばれるようになったこの用水は、慶長9年(1604)に完成し、領地内には豊富な水が注がれるようになった。続いて天狗岩用水と引水した五千石用水を利用した新田開発が行われ、やはり地侍層の有力農民が率先して協力した。これにより6千石の総社領は1万石の豊かな土地となり、藩の財政は極めて豊かになった。

秋元氏は長朝・泰朝^{やすとも}2代にわたり約30年間総社の地を治め、寛永10年(1633)甲州谷村藩^{こうしゅう やむら}(都留市)へ転封となった。秋元氏が去ったことで総社藩は廃藩となり、旧総社領は高崎・沼田・前橋藩領等に分かれ幾多の変遷をたどることとなる。

ウ 前橋藩と酒井氏

天正18年(1590)、徳川家康が関東に入ると、江戸城北西の外郭に位置する上野国は防衛の用地として重視され、厩橋城(のちの前橋城)に甲府城代であった平岩親吉^{ひらいわちかよし}が3万3千石で封じられた。慶長6年(1601)に平岩氏が甲府に移ると、慶長8年(1603)に譜代筆頭格の酒井重忠^{さかい しげただ}が川越1万石から2万3千石を加増されて、領主として入封した。その際、重忠は徳川家康から「汝に関東の華をとらす」と言われたという。以降、酒井氏による治世が9代、約150年の間行われ、とくに2代忠世^{ただよ}、4代忠清^{ただきよ}が老中、大老になるにつれて所領も15万石に拡大し、まさに「関東の華」に相応しい城下町へと発展。前橋の礎が確立され、「前橋の誇り」とも言える華々しい時代が続いた。

初代藩主重忠による治世は、元和3年(1617)7月に没するまでの16年間である。その施策は明らかにはなっていないが、町奉行を2人任命し、城郭普請とともに城下町整備に着手している。厩橋城は、重忠によって近世城郭として整備された結果、城下町の中心である本町が形成されたと推測されている。

2代藩主忠世は、慶長15年(1610)から寛永13年(1636)まで老中として草創期幕閣の中心にあり、江戸にいながら藩政を家老や代官に指示している。この指示書が「酒井家文書」に50通ほど残されており、役人の職責や規律、領民対策など多岐にわたっている。また、慶長12年(1607)、家康の駿府城^{すんぶじょう}移城^{がしごんじょう}に賛詞言上^{うたのかみ}したことにより、以降酒井家は「雅楽頭」を命ぜられることになった。

忠世の没後、忠行^{ただゆき}時代に酒井家の所領は最高の15万2500石余と拡大した。しかし、襲封後1年足らずで没し、寛永14年(1637)には当時14歳であった忠清^{ただきよ}が4代藩主となった。忠清は寛文6

年（1666）に大老となり、その在職期間は 15 年に及び、権勢は江戸屋敷の位置から「下馬将軍」と呼ばれるほどであった。権威は伊達騒動や越後騒動の裁決、将軍継嗣問題で頂点に達したが、継嗣問題で延宝8年（1680）に失脚。その後、天和元年（1681）に藩主となった忠孝は藩政に専念し、藩校の創設や災害に備える社倉を制定する等、名君と呼ばれている。藩校「好古堂」内には御用場（評定所）をおいて裁判の公正を期し、元禄13年（1700）には大胡領内にも藩校「求知堂」を設立し、老臣以下の家臣に学問や武芸を奨励した。また正式に地名を「厩橋」から「前橋」と改名したのは、忠孝の時代であると言われている。そのほか、貞享元年（1684）に藩儒・古市剛に命じて『前橋風土記』を編授させたり、元禄3年（1690）には城下北部に観民亭（茶室）を建てたりしている。こうした忠孝の尽力により、かろうじて財政状況は改善したものの、度重なる自然災害によって藩財政は悪化の一途をたどった。忠孝の後、忠相・親愛・親本・忠恭が藩主となったが、忠恭の代である寛保2年（1742）の上野国一帯に及ぶ洪水は財政難を決定づけることとなった。度重なる利根川の氾濫は城地を破壊し続け、ついに寛延元年（1748）には本丸を放棄し、三の丸に移転することを幕府に申し出ている。転封の嘆願は7代藩主親愛の時よりなされていたが、寛延2年（1749）に松平氏の所替えが重なり、忠恭は姫路へ転封となった。この転封をめぐり、反対していた在藩家老の川合勘解由左衛門定恒は姫路で刃傷事件を引き起こしている。

エ 前橋藩と松平氏

寛延2年（1749）に酒井氏が姫路に移り、代わって姫路から松平朝炬が藩主となる。当時 11 歳であった松平朝炬は、領内で一揆が起こったこともあり、要地である姫路には適当ではないとされたのである。前橋城は本丸の移転を含む城郭の修復も完了していない状態であったが、財政破綻の影響もあり、宝暦2年（1752）によりやく工事が開始している。こうした普請と並行して冠木門・車橋門などの修復が寛延3年（1750）から宝暦8年（1758）にかけて行われたが、城郭全体の完全修復までには至らなかった。酒井氏時代からの利根川による川欠け（城地への浸食）は続いており、『松平藩日記』にあるように、本丸から三の丸に移した居宅も危険となり、城としての体裁を保持できない状態であった。加えて、宝暦6年（1756）と明和4年（1767）の大火は更なる追い打ちとなり、明和4年（1767）に朝炬は川越へ移り、前橋城も取り壊されることとなった。以後、約 100 年の間、前橋は川越藩の前橋分領として陣屋支配となった。

この間、前橋の衰退は甚だしく、戸数も減少し、農村の疲弊もすすんだ。そうした状況を危惧した生糸商人をはじめとする領民は、「前橋の再生は藩主松平氏の帰城が第一」と文化14年（1817）に帰城嘆願書を当時の川越藩主である松平齊典に提出した。齊典も天保9年（1838）幕府へ帰城嘆願を行っているが、莫大な資金が必要となる帰城は簡単には実現には至らなかった。しかし、荒廃した状況において起死回生の契機となったのは、生糸であった。横浜港が開かれると、国産生糸は爆発的活況を呈し、生糸商人らの力は莫大なものとなり、破綻していた財政は一挙に改善に向かうこととなる。さらに、安井与左衛門政章等による利根川の治水工事が行われ、廃城の原因である利根川氾濫の脅威が取り除かれると、前橋城再築と帰城活動は勢いづき、11代藩主直克は前橋城再築内願書を提出し文久3年（1863）12月に幕府から前橋城再築・移転が許可された。前橋城再築の費用は領民の

献金と農民の蚕積金^{さんせききん}¹、労力は領内の農家に割り当てられた。その結果、管内の7万4千余人が動員され、総献金は5万2400両に上った。慶応3年（1867）3月に前橋城は再築され、藩主直克が帰城し、城下町前橋（前橋藩）が復活した。

しかし、同年10月大政奉還、12月王政復古の大号令により幕府は滅亡し、明治維新を迎え、前橋が城下町として発展する期間はごくわずかであった。

④近代

ア 県都（群馬県の県庁所在地）

明治2年（1869）の版籍奉還を経て、明治4年（1871）の廃藩置県により第一次群馬県が誕生すると、県庁を誘致し「県都」としての発展を目指した。同9年（1876）に第二次群馬県が成立すると、旧前橋城に仮庁が置かれ、県庁所在地として出発、同14年（1881）に正式に群馬県の県庁所在地（県都）となり、城下町から県都への転換が図られた。県庁誘致運動の中心となったのは「前橋二十五人衆」といわれた下村善太郎ら生糸商たちであった。民力により再築された前橋城本丸御殿が県庁舎や県会議事堂となり、群馬県師範学校、県衛生局兼医学校、小学校、鉄道、道路、官舎などの社会資本や臨江閣も、生糸商や製糸業者等による民力により整備された。明治25年（1892）4月、前橋市となった。関東地方では東京、横浜、水戸について4番目の市制施行であった。

イ 製糸都市

江戸時代以来、前橋は生糸の集散地で、横浜開港以来、前橋生糸商が海外への生糸貿易を担い、幕末に活躍した下村善太郎・江原芳平・竹内勝蔵・勝山宗三郎・市村良平は「五大生糸商」と呼ばれた。

明治時代になると生糸の集積地から製糸都市へと転換した。製糸都市の形成には3つの流れがあった。第1は器械製糸の流れである。明治3年（1870）に前橋藩は全国初の西洋式器械製糸を導入し藩営前橋製糸所を開業した。世界遺産になった官営富岡製糸場より早く、そのモデルとなった。スイス人技師ミュラーが技術指導し、前橋藩士速水堅曹と姉の西塚梅や藩士の娘たちが技術を習得、全国から伝習生を受け入れた。廃藩置県により藩営前橋製糸所が小野組に払い下げられたため、深澤雄象・速水堅曹・桑島新平らは県の援助のもと研業社（関根製糸）を明治8年（1875）に創業した。研業社は蚕種・養蚕・製糸を一体化するという試みであった。藩営前橋製糸所・研業社は官営富岡製糸場とともに全国への技術伝播の拠点となった。

第2は士族と農民による改良座繰結社の流れである。明治9年（1876）、県令（知事）楢取素彦は速水堅曹・星野長太郎らと群馬県産の生糸のアメリカへの直輸出を計画、新井領一郎を派遣した。新井に送られた器械と座繰の生糸はともに高値で売れた。そこで星野は勢多郡・山田郡内の農民製糸家、深澤は前橋町・沼田町の士族製糸家を結集して改良座繰結社が誕生した。製品検査や統一荷造を行う本社組織として明治11年（1878）に精糸原社が設立された。改良座繰結社という経営形態も全国に広がった。精糸原社は海外直輸出路線であったのに対して、横浜で外国商館に売り込む精糸交水

¹ 松平斉典が行った前橋分領の興農政策の一つ。嘉永元年（1848）から始められ、養蚕農家の繭売却代金の一部を積み立て、農村復興資金に活用しようとするもの。

社(交水社)が誕生し、大正時代には交水社が前橋製糸の代表となった。交水社の器械製糸の発展で、本市の製糸業は最盛期を迎えた。

第3は生糸商の改良座繰結社の流れである。明治10年(1877)に横浜―前橋間に電信が開通し、生糸価格格差が縮小し、座繰小生産者の結社が出現すると、生糸商は製糸家に転じた。下村善太郎が昇立社(明治11年(1878))、江原芳平が天原社(同12年(1879))、勝山宗三郎が勝山社(同11年(1878))、市村良平が市村社(同13年(1880))を創設。生糸商の改良座繰結社は原料繭を購入し賃挽させ集中揚げ返しをするものであった。

この三つの流れを基盤に前橋は製糸都市となり、都市部には糸や繭が集められ、至るところに製糸工場やレンガ倉庫が建設された。特に広瀬川と佐久間川を挟んだ地域には製糸工場が林立した。農村部では、どの家庭でも蚕を飼い、まさに、生糸を中心とする産業構造となっていく。こうして前橋は、長野県岡谷市と愛知県豊橋市と並ぶ日本三大製糸都市となった²。

ウ 鉄道による発展

生糸貿易の発展は、①資金調達の金融機関(銀行)、②生糸や繭・石炭などの輸送の鉄道、③横浜との情報交換の電信に支えられた。わが国の草創期の鉄道整備は明治14年(1881)設立の半官半民の日本鉄道会社が担った。前橋は計画から外れていたが、製糸会社や同業に従事した豪商・豪農が大株主となって前橋まで延伸させ、明治17年(1884)8月に上野―前橋間(前橋線)が開通。翌年に品川―赤羽間(品川線)が開通し、前橋と横浜が直結した。東海道線より早い開通であった。明治22年(1889)には群馬・栃木両県の製糸・織物の豪農・豪商により両毛鉄道が高崎―小山間に開通。両毛鉄道は「産業鉄道」で、沿線地域の産業革命が進展した。利根川に架設された両毛鉄道の鉄橋や利根橋などの橋梁により、利根川左岸に立地し発展が阻害されていた要因が克服された。

エ 製糸業とキリスト教

前橋を含む群馬県のキリスト教の特色のひとつが、製糸業など地域の産業を担う有力者が、携わる産業の成果を上げるため西洋の近代文明・科学的知識の摂取を追求し、その精神的基盤であるキリスト教に出会い入信したことであった。製糸工場内に説教所をつくり、工女にキリスト教を勧め、日曜学校でキリスト教主義教育を行った。前橋の製糸業の経営は協同主義、家族的であったうえ、キリスト教の影響で他県などの大資本の営業製糸に比べ、工女を大切にした。

製糸技術・協同経営・キリスト教は前橋に伝習に来た人々により全国にもたらされた。有名なのは、研業社に伝習に来た高倉平兵衛がこれらを学び、郡是(グンゼ、京都府何鹿郡)製糸の発展のものを築いたことであった。

キリスト教の定着は教育活動にも大きな影響を与えた。明治中期、各地で私立の英学校が開設されるようになると、前橋でも前橋英和学校が開設され、青年たちに英語などを教えた。その後、深沢利重らの尽力により前橋英和女学校(現在の共愛学園の前身)が開設され、県下最古の女学校として女子教育に貢献した。

² 出典：『製糸の都市前橋を築いた人々』前橋商工会議所編(平成30年)

オ 連合共進会とくらしの近代化

明治43年(1910)に前橋市を会場に群馬県主催の「一府十四県連合共進会」が開催された。関東甲信越と東北地方の各府県が参加した産業博覧会で、群馬県設置以来の最大のイベントとなった。イベントの電力をまかなうため県の支援をもとに利根発電株式会社が誕生し、市内に電灯がとまり、前橋一渋川間の馬車鉄道が電気軌道(路面電車)となった。共進会場で提供された洋食、洋楽、活動写真(映画)が共進会后に市民生活に広がり、洋式化が進み、映画館が続々と開館し、娯楽・消費をはじめ暮らしが一変した。

昭和3年(1928)に中央前橋—西桐生を結ぶ上毛電気鉄道が開通し、赤城山南麓地域が発展。翌4年(1929)には上水道が完成し、市内に200か所に設置された共用栓は美的(モダン)共用栓として昭和モダンを象徴した。

カ 萩原朔太郎の文化による郷土改良運動

製糸業を基幹産業として発展している前橋市に萩原朔太郎が生まれた。朔太郎は大正時代のほとんどを前橋で暮らし、日本に近代詩を確立する文学の革命を前橋から起こした。また、文学と音楽活動によって郷土改良運動を進め、上毛マンドリン倶楽部などのオーケストラを結成。文学、音楽、絵画などの活動が盛んとなり、文化の底辺が拡大した。

こうした土壌に世界的潮流であった新興芸術(前衛絵画・演劇・舞踏)も流入し、萩原恭次郎ら朔太郎の影響を受けた詩人たちを中心に担われた。前橋市は大正デモクラシー、昭和モダンの最先端を担う地方都市となった。

キ 世界恐慌と地場産業

昭和4年(1929)にアメリカに端を発した世界恐慌が起こった。翌5年(1930)から6年(1931)にかけて市内の製糸工場は操業停止や短縮を強いられ、壊滅的な打撃を受けた。世界恐慌までの前橋の産業は、生糸・玉糸・撚糸・織物などが中心であった。恐慌を機に、たんす・竹細工・木工・食料品の生産が伸長し、東京・大阪方面へ出荷された。

養蚕用具は竹製品であった。竹工業から木工業が発展し家具製造業に、製糸工女の食料の漬物が食品業として発展した。製糸業が戦後にかけて斜陽化するのにもなって、家具木工業、食品業が前橋の地場産業となった。また、戦時下になると、軍需産業の中島飛行機製作所や理研などが工場誘致され、重工業も発展した。

製糸都市から赤城山や敷島公園を拠点として観光都市、軍需産業を核とする工業都市への転換が目指された。

【歴まちコラム・生糸関連用語】

- 前橋の生糸／幕末から明治にかけて、前橋の生糸はヨーロッパで高く評価され、「Maibashi」の名で流通した。
- 生糸商／外国商社を商売相手とする売込問屋^{うりこみどんや}に生糸を卸す商人のこと。地元前橋での調達価格と生糸相場の差額で莫大な富を得た。
- 交水社／明治 10 年（1877）創業の精糸交水社を前身とする製糸会社。最盛期には全国 5 位、前橋 1 位の製糸会社となり、広瀬川沿いの大規模工場を含め市内で広く操業した。
- 座繰^{ぎぐり}／繭を煮て柔らかくほぐれてきたところを数粒まとめて、鍋の前に座りながら糸を座繰器に掛け、手引きによって糸取りをする方法。
- 座繰製糸／手廻しの座繰器や、足踏器を用いて人力で機械を動かす行う。
- 器械製糸／水力や蒸気で機械を動かす繰棒^{くりわく}（生糸を繭から巻き取る棒）を回転させ、糸を巻き上げる。
- 集中揚返^{あげかえし}／揚返とは繰棒（小棒）に巻き取った生糸を揚棒（大棒）に巻き返す工程のこと。集中揚返は「共同揚返」とも言い、共同の揚返所で集中的に揚返を行う。
- 改良座繰結社／座繰小生産者や生糸商らで結成した組織。従来の座繰器を改良した手法で、数社の小棒を 1 か所で大棒に移し替える「共同揚返」を行い、高い生産効率を誇った。
- 賃挽^{ちんびき}／各農家や町屋の賃挽人と契約して一定の原料繭を前貸給付し、挽いた糸の量と質に応じて賃賃を支払う仕組み。
- 生糸・玉糸／生糸は、蚕の繭からとったままの絹糸のこと。玉糸は、玉繭（1 つの繭を 2 匹以上の蚕が作った繭）から繰糸した糸。生糸より太く、節があるが丈夫で織物の原料糸となった。
- 撚糸^{ねんし}／原料となる生糸に撚^{より}をかけて作る、強靱な糸のこと。戦後、本市の製糸工場は次々と姿を消していったが、撚糸工場のいくつかは近年まで存続した。

⑤現代

ア 前橋空襲と復興

昭和 20 年（1945）8 月 5 日、市街地はアメリカ軍の無差別空爆により、8 割が焼失。罹災人口率は 65% で東京より高く全国都市 11 位であった。前橋空襲で明治時代以来の繁栄の蓄積を失った。同 25 年（1950）に戦災復興財源確保を目的に前橋競輪を開催。同 28 年（1953）に高崎—前橋を結ぶ群馬大橋が完成し、前橋駅前に戦災復興記念塔が建設された。全国の被災地方都市の中で最も早く復興を成し遂げた。

同 27 年（1952）は市制施行 60 周年、同 28 年（1953）は市役所新庁舎完成、同 29 年（1954）は勢多郡上川淵村・下川淵村・桂萱村・芳賀村・南橋村・群馬郡元総社村・総社町・東村^{あづまむら}が合併したので、これらを記念し、同年に前橋グランドフェア³を開催。戦後復興に区切りをつけた。群馬大橋

³ 市制施行 60 周年、市庁舎落成、町村合併を記念し「大前橋建設記念行事」として開催された大共進会。1 か月間にわたり、市内各所で各種イベントや物産販売、特設展示などが行われた。

は戦後復興を象徴しオレンジ色であった。同 29 年（1954）に町村合併を記念し「前橋市中央児童遊園」（愛称・るなばあく）もオープンした。

イ 昭和の合併と生産都市

戦後復興を果たした前橋市は生産都市への脱皮を目指した。昭和 35 年（1960）から造成された東前橋工業団地は家具製造業や食品業など前橋の地場産業を中心とした企業 138 が進出。中島飛行機前橋工場にはダイハツ、理研前橋工場には東芝が進出した。翌年から町村合併した総社・元総社地区地域に 1 号から 3 号工業団地を造成し、工場誘致を図った。

昭和 30 年（1955）から 42 年（1967）にかけて清里村・木瀬村・上陽村・城南村などが全村または分村合併し、昭和の合併が完成すると、昭和 40 年から 50 年代にかけて合併した芳賀・下川淵・上川淵・城南・上陽地区に工業団地を造成するとともに、南橋・東・上川淵・上陽地区には大規模な住宅団地を造成した。

その結果、昭和 40 年代に入ると前橋市を含む群馬県は軽工業から重工業へと中心が転換し、電気機器・輸送機器・一般機械・食料品・鉄鋼金属が群馬の五大工業⁴となった。幕末から 1 世紀以上にわたって本市の基幹産業を担った蚕糸業の衰退は顕著で、市内から製糸工場が次々と姿を消し、周辺の養蚕農家も果樹・野菜・花卉などの都市型近郊農業へ転換し、見渡す限り桑園であった景観も一変。戦前の製糸都市から農・工・商が偏りのない総合都市へ再生した。

ウ 平成の合併と大前橋

昭和 58 年（1983）に国民体育大会（あかぎ国体）が前橋市を主会場に開催された。群馬県の歴史において、明治 43 年（1910）の一府十四県連合共進会、昭和 9 年（1934）の陸軍特別大演習と県内行幸、同 58 年（1983）のあかぎ国体は三大事業といわれ⁵、群馬県発展の契機としてきた。県庁所在地の前橋市は三大事業の主会場であったため躍進を遂げた。あかぎ国体においても、両毛線の高架化や運動競技場をはじめとするスポーツ文化施設の整備、ホテルなどの観光業の発展などが図られた。

昭和 44 年（1969）に前橋市・富士見村・大胡町・宮城村・粕川村が広域市町村圏構想に基づき広域圏を形成。その蓄積のもと平成の合併で大前橋が誕生した。

（2）関わりのある人物

①前橋四公

現在の前橋市は江戸時代に城下町として発展したことが原点。江戸時代の前橋市域には総社藩、前橋藩、大胡藩が置かれた。総社藩には秋元家、前橋藩は酒井家・松平家、大胡藩は牧野家が治め、この四家を前橋四公という。秋元長朝は城下町総社を築くと共に新田開発のため天狗岩用水を開削。牧野康成は城下町大胡を築くと共に江木地区を新田開発。秋元も牧野も転封し両藩はなくなるが、総社と大胡が立藩の地であった。酒井家は 3 万石であった前橋藩を 15 万石の譜代の関東一の大藩とした。4 代忠清は大老に就任、5 代忠孝とともに文治政治を展開し、「関東の華前橋」といえる最盛期を築いた。徳

⁴ 出典：『郷土群馬の歴史』井上定幸編（平成 9 年）

⁵ 出典：『群馬県史 通史編 7 近代現代 1 政治・社会』群馬県史編さん委員会編（平成 3 年）

川家康の二男の流れをくむ松平家は、川越に移城したが、前橋に帰城し日本で最初の洋式器械製糸の藩
 営前橋製糸所を開業し、前橋が日本を代表する製糸都市となるもとを築いた。



酒井雅楽頭



松平大和守



秋元越中守



牧野駿河守

※いずれも前橋四公祭イメージキャラクター ©井田ヒロト

②生糸七賢臣

前橋藩士の^{ふかさわゆうざう}深澤雄象、^{はやみけんそう}速水堅曹、^{くわじましんべい}桑島新平、^{すずきしやうさく}鈴木昌作、^{たかすせんべい}高須泉平、^{すずきこじゅうろう}鈴木小十郎、^{まつもとげんごろう}松本源五郎らは製
 糸業を前橋藩だけでなく世界市場で評価される日本の基幹産業に育てようとした中心人物であった。
 幕末開港後に海外で「Maibashi」と称されるほど評価された前橋糸が粗製乱造となるのを防ぐため、藩
 は生糸商人と協力し品質の維持につとめた。鈴木昌作は生糸^{きいとあらためじょ}改所、藩直営の売込問屋敷島屋庄三郎
^{しやうてん}商店の設立に尽力。深澤雄象と速水堅曹は日本で最初の洋式器械製糸の藩営前橋製糸所を創業。桑島
 新平らと器械製糸の研業社を創業し、器械製糸の全国普及の原点となった。また、深澤・松本は士族授
 産として改良座繰結社を呼びかけ、アメリカへの直輸出路線をとったのに対して、高須泉平・鈴木昌
 作・鈴木小十郎は堅実な横浜売り路線を採り交水社を創設。器械化を進めた交水社は、農民製糸家の参
 加を得て大正時代に群馬県や前橋市を代表する製糸会社となる。



深澤雄象



速水堅曹



桑島新平



鈴木昌作



高須泉平



鈴木小十郎



松本源五郎

③四大養蚕家

前橋周辺の農村で養蚕が農家の主要な収入源になると、神頼みであった養蚕を科学的な見地からより安定した経営にするため、蚕種・桑園改良・蚕の飼育法を研究し伝習教授する指導者が現れた。当時の代表的な飼育法には、後に世界遺産となった高山社（藤岡市）の高山長五郎が考案した清温育があったが、前橋市域では井草太郎右衛門（群馬郡青梨子村、清里地区）、松下政右衛門（同）、船津伝次平（勢多郡原之郷村、富士見地区）、塩原佐平（勢多郡田口村、南橘地区）が、養蚕史において優れた功績を遺した。

井草太郎右衛門は養蚕に火を用いる「薪火温暖育（焚火育）」、松下政右衛門は清涼育と温暖育を取り入れた折衷育の「暖爽育（のち適蚕毓）」を創案。船津伝次平は清涼育による「糸繭生産」を体系し全国を巡回指導。塩原佐平は育蚕技術の改良と蚕種製造技術者の養成を行うと共に蚕種「又昔」の一種である「塩原又（亦）」を創案、桑島新平、船津伝次平らと協力し養蚕業の発展に尽くした。



井草太郎右衛門



松下政右衛門



船津伝次平



塩原佐平

④五大生糸商と二十五人衆

横浜での生糸貿易による莫大な利益をもとに前橋城再築と藩主の帰城、さらには県庁誘致運動が成功し、前橋は城下町から県都になった。その中核が下村善太郎・江原芳平・竹内勝蔵・勝山宗三郎・市村良平ら五大生糸商であった。

また県庁移転の条件に県令楯取素彦が①官舎、②師範学校、③衛生局兼医学校の建設を上げると、五大生糸商を含む25人⁶が献金。二十五人衆を中心とする民力により、鉄道を含む県都前橋の社会資本が整備された。



下村善太郎



江原芳平



竹内勝蔵



勝山宗三郎



市村良平

⁶ 下村善太郎・江原芳平・竹内勝蔵・勝山宗三郎・市村良平・須田伝吉・勝山源三郎・荒井友七・荒井久七・大島喜六・横川重七・久野幸八・中島政五郎・生方八郎・深町代五郎・横川吉次郎・八木原三代吉・串田宗三郎・田部井惣助・太田利喜蔵・鈴木久太郎・松井林吉・武田友七郎・筒井勝次郎・桑原寿平の25人。

⑤四詩人

県都前橋は群馬県の文化活動の中心となり、文学・美術・演劇・音楽などの活動が盛んであった。特筆すべきは、詩文学で、平井晩村^{ひらいばんそん}は民謡詩、萩原朔太郎^{はぎはらしゅたろう}は近代詩、高橋元吉^{たかはしもときち}は白樺派の影響を受けた人道主義的な詩、萩原恭次郎^{はぎはらきよじろう}は前衛詩で、日本の文学史にその名を刻み、正岡子規^{まさおかしき}や高浜虚子^{たかはまきよし}・河東碧梧桐^{かとうへきごとう}らの俳人の出た松山を俳都と呼ぶのに対して、前橋を詩都（詩のふるさと）と称するものにした。



平井晩村



萩原朔太郎



高橋元吉



萩原恭次郎

4 文化財等の分布状況

前橋市には、令和4年（2022）4月1日現在で、合計345件の文化財がある。その内訳は、国指定文化財が20件、国登録文化財が25件、県指定文化財が56件、市指定文化財が244件となっている。記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財については、「下長磯の式三番」1件が選択されており、群馬県の重要無形民俗文化財に指定されている。

表：文化財種別件数

種類		国		県	市
		指定	登録	指定	指定
有形文化財	建造物	3	24	8	60
	絵画			13	8
	彫刻	1		3	21
	工芸品			8	21
	書跡・典籍			1	9
	古文書			1	
	考古資料	2		2	7
	歴史資料	1		2	15
民俗文化財	有形の民俗文化財		1		24
	無形の民俗文化財			2	21
記念物	遺跡	11		12	45
	名勝地			1	
	動物、植物、地質鉱物	2		3	13
合計		20	25	56	244

※国記録選択

記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	1
-----------------------	---

【前橋の文化財の特徴】

ここでは本市所在の国・県・市の指定・登録文化財を、指定種別・分布・時代から概観し、その特徴を見ていくこととする。

すべての指定・登録文化財345件のうち、指定種別からみると、有形文化財が186件と最も多く、遺跡の68件が次ぐ。有形の民俗文化財24件、無形の民俗文化財23件、登録有形文化財25件はほぼ同数で、動植物・地質鉱物が18件と続き、名勝地はわずか1件のみである。

所在地域からみると、旧市域191件、次いで宮城地区88件、大胡地区26件、粕川地区22件、富士見地区16件、市外2件となる。半数以上を占める旧市域内の分布を詳細に見ると、中央地区が最も多く（75件）、次いで利根西地区46件、城南地区35件、朝倉・広瀬地区16件となり、桂萱地区や芳賀地区、南橋地区が次ぐ。

遺跡以外の記念物、無形の民俗文化財を除く指定・登録文化財の所産時期を見ると、近世が 104 件、中世（鎌倉時代（平安時代末期）～戦国時代）が 103 件とほぼ同数で、古代（古墳時代～平安時代）が 46 件、近現代（明治時代以降）45 件、原始（旧石器時代～弥生時代）5 件と続く。平安時代末期の文化財を古代に含めるか中世に含めるかなど意見が分かれる文化財も多いが、概ねの傾向は把握できよう。

次に指定種別毎に詳細に見ていきたい。合計 68 件を数える遺跡は、墳墓や城館跡、住居跡、生産址などに分けることができる。文化財指定された生活痕跡はわずか 4 件ながら、旧石器時代及び縄文時代の住居跡等が残されており、宮城・粕川地域に残されている。宮城地区に所在する「市之関縄文住居跡」は学史上著名な史跡である。

墳墓は 42 件と最も多く、その内古墳は 30 件を占める。前述のとおり県内の悉皆調査により市内で 1,500 基以上が確認されており、古墳時代の繁栄の様子がその数に反映していると言えよう。中でも前橋八幡山古墳や大室古墳群をはじめ大型古墳が目立ち、本市域が中心的地域の一つであったことを物語っている。その分布は旧市域に多く、城南地区や朝倉・広瀬地区、利根西地区の総社町に目立つ。朝倉・広瀬地区は八幡山古墳や前橋天神山古墳など古墳時代初頭から大型古墳を築造し、古墳時代後期まで連続と大古墳群を築いた。また、城南地区には前二子古墳をはじめとした大室古墳群を形成し、古墳時代末期には総社地区に愛宕山・宝塔山・蛇穴山古墳の大型方墳が築かれ、利根西地区を中心とした地域に収斂（しゅうれん）していく様子が見られる。本県域全体で見ても、古墳時代終末期に総社古墳群に比肩する古墳群は見られず、利根西地区は古代上野国の政治や経済、文化の中心地域として栄え、山王廃寺跡や上野国分寺跡が置かれる。なお、生産や生業に係る遺跡としては片並木製鉄跡や女堀などがある。女堀は前橋市上泉町から伊勢崎市田部井町にかけての全長 13km に及ぶ農業用水路跡遺構であり、古代から中世への転換期を象徴する史跡である。

墳墓に次ぐのは 14 件の城館跡である。分布は大胡・宮城・粕川地区に多く、特に大胡城跡や膳城跡などの遺存状態が良好な中世の城館跡が目立つ。前橋城車橋門も近世城下町として発展した中央地区の繁栄の様子を今に伝える。

総数 186 件と最も多い有形文化財は、建造物が 71 件と最も多い。指定件数の多い旧市域および宮城地区に多く分布するが、旧市域では比較的均等に存在し、各地区全体に残されていることが分かる。特に宝塔（ほうきょう）や宝篋（ほうきょう）印塔、石塔婆（いしとうば）、石幢（せきどう）といった中世の石造物が目立ち、仏教が庶民層まで広く浸透し、激動と戦乱の時代に救いを求めた人々の様子を映す。問屋町所在の「笠薬師塔婆」は本県内の石仏では早い例で、四面に刻まれた裸形の坐像は四方からの礼拝の受けていたものだろう。また、石幢は関東地方でも群馬県に多く、赤城山南麓と榛名山東南麓に集中する。信仰に係る石造物が多いことは、本市域が戦乱の世にありながら各地の人々が強く救いを求めた様子を反映する。

木造や石造の彫刻文化財は 25 件を数える。「日輪寺の十一面観世音像」や「無量寿寺の十一面観音立像」は平安時代にさかのぼり、無量寿寺創建の際に本山である護国寺よりもたらされたと伝えられる。鎌倉時代に入ると赤城山信仰が広まり、「慈照院の千手観音坐像」や「無量寿寺の地藏菩薩立像」は信仰の様子を示すと言えよう。

絵画（21 件）や書跡（10 件）、歴史資料（18 件）のうち、妙安寺所蔵の文化財は 22 件を数える。妙安寺は親鸞ゆかりの古刹（こくし）で、前橋藩主酒井重忠の招請により移転したと伝え、家康より送られた数多くの書画・什物が残されている。また妙安寺歴代住職により記された「一谷山記録」は、江戸初期の前橋藩の歴史を知ることのできる重要な史料である。また、孝顕寺や東照宮、源英寺、龍海院などに歴代前橋藩主に

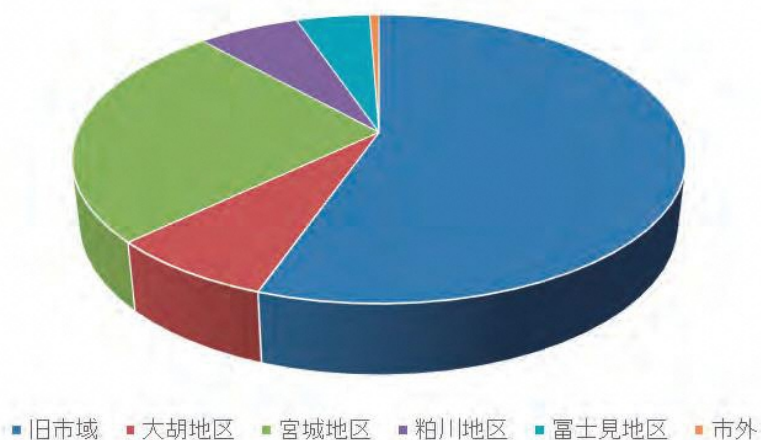
係る絵画や工芸品、墓所などが数多く残されており、中央地区が前橋市域の中心として繁栄していた様子を示す。

一方、近世以降本市域では養蚕が盛んになり、養蚕に特化した農家建築が数多く築かれた。飯土井町から移築した「関根家住宅」はその典型例である。また、「塩原家住宅」は蚕種製造業を営んだ木造瓦葺3階建ての建造物で、主屋や附属建物が近代の蚕種製造民家の様子をよく示す。また、同家に残された「塩原佐平家文書および関連資料一式」は、明治期～昭和期にかけての本県の蚕種業の変遷過程を具体的に知ることができる史料であり、本市の近代以降の蚕種業史を知るうえで重要である。

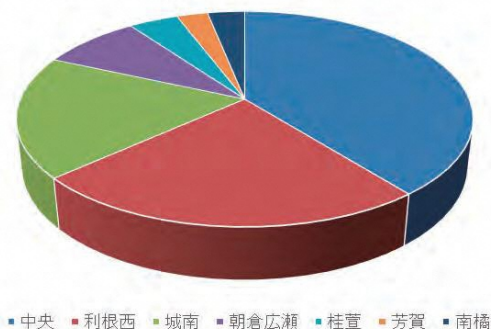
登録有形文化財としては25件を数え、県庁が置かれたことから「群馬県庁舎」や「群馬会館」などの政治に係る施設や、「前橋市浄水場配水塔」や「上毛電気鉄道大胡駅駅舎」など近代化を支えた水道や鉄道施設などが目立つ。「臨江閣（本館、別館、茶室）」は明治期の迎賓施設として重要文化財に指定されている。また、「前橋の養蚕・製糸用具及び関連資料」は、本市の重要な主産業であった養蚕や蚕種、製糸業に係る民俗資料であり、当時の様子を今に伝える。

この他有形の民俗文化財（24件）や無形の民俗文化財（23件）は古くからの生業や習俗の様子を伝え、動植物・地質鉱物（18件）や名勝地（1件）は赤城山を頂とする当地の豊かな自然を表すものと言える。

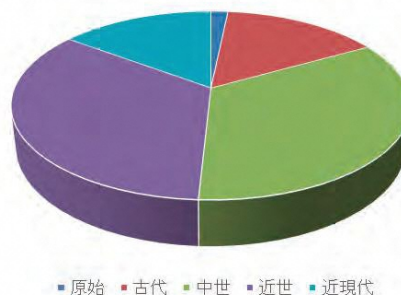
指定文化財・登録文化財の分布（全体）



旧市域の文化財の分布（地区別）



指定・登録文化財の年代
（名勝地・動植物・地質鉱物、無形の民俗文化財を除く）



①国指定の文化財

本市所在の国指定の文化財は 20 件あり、種別で重要文化財 7 件（建造物 3 件、彫刻 1 件、考古資料 2 件、歴史資料 1 件）、史跡 11 件、天然記念物 2 件がある。古墳を中心とした遺跡の数は他市町村と比較しても多く、古代東国文化の中心地として繁栄していたことを物語る。また、建造物関連の調査・研究の進展に伴い、近年建造物の指定が増加している。

ア 阿久沢家住宅（重要文化財）

阿久沢家住宅は、江戸時代に名主や組頭をつとめた旧家で、構造手法からこの住宅の建築年代は 17 世紀末頃と推定される。茅葺寄棟造で、開口部は極めて少なく、棟は芝土をおいて棟の固めとした「クレグシ」とする。北関東の平地における典型的な中規模農家である。建築後、数度にわたり改築されたが、昭和 49 年（1974）から 50 年（1975）にかけて解体修理が行われ、当初の姿に復原された。



阿久沢家住宅

イ 臨江閣（重要文化財）

本館・別館・茶室の 3 棟が指定されている。本館は、県令・楫取素彦の提言により、初代市長となる下村善太郎をはじめ、地元の生糸商や製糸業者等の醵金（お金の出し合い）によって、明治 17 年（1884）に迎賓館として完成した。茶室は県令楫取素彦や県庁職員の募金により、本館より 2 か月遅れて完成した。いずれも明治期の和風（数寄屋風）建築で、各所に当時の高度な技術や豊かな意匠が取り入れられている。別館は、明治 43 年（1910）に前橋市で開催された一府十四県連合共進会の貴賓館として建てられた書院風建築であり、閉会後は大公会堂として利用された。戦後は市役所が疎開し、その後、社会教育施設として利用され、長い間市民に親しまれてきた。



臨江閣別館

ウ 塩原家住宅（重要文化財）

塩原家住宅は、明治 14 年（1881）頃から蚕種業を本格的に生業として開始し、「塩原赤」という蚕の一大品種を生み出し、全国的に名を馳せた初代塩原佐平の居宅兼蚕室として、大正元年（1912）頃に竣工された建物である。昭和 32 年（1957）には主屋が「塩原蚕種株式会社」の社屋とされた。小高い丘陵上に建てられた主屋は、県内でも最大規模の養蚕農家であり、周囲の建物を圧倒して、地域のランドマークともなっている。木造瓦葺き 3 階建てで、1 階は贅を凝らした接客スペースを備えた居住空間とし、2・3 階は養蚕・蚕種製造に特化したつくりとなる。



塩原家住宅

また、敷地内には蚕種製造の工程を伝える一連の付属建物が残り、明治から戦後に至るまでの近代蚕種製造民家の様相をよく示している。

エ 大室古墳群（史跡）

西大室町、東大室町にある古墳群で、6世紀初頭から3代にわたってつくられた大型前方後円墳を中心として古墳が分布する。前二子古墳・中二子古墳・後二子古墳の順に築かれ、小二子古墳を含めた4基が史跡指定されている。前二子古墳及び後二子古墳の石室は明治11年(1878)に開口し、英国人外交官のアーネスト・サトウも調査に訪れている。古墳の規模や優れた副葬品など赤城南面に君臨した有力豪族一族の力を今に伝える。現在は総合公園として整備公開されている。



前二子古墳



中二子古墳



後二子古墳



小二子古墳

オ 女堀（史跡）

女堀は、前橋市上泉町から伊勢崎市田部井町にかけての全長約13km、幅15～30m、深さ3～4mに及ぶ巨大な農業灌漑遺構である。天仁元年(1108)に噴火した浅間山により荒廃した地域の大規模な再開発事業であり、12世紀中頃に淵名氏が領主を務める荘園(淵名荘)への用水路として造られたとみられるが、通水されることなく未完に終わっている。中世初期の農業史、農業土木史、荘園史を知ることのできる重要な史跡である。



女堀

カ (総社) 二子山古墳（史跡）

江戸時代から出土遺物のすばらしさで注目されたこの古墳は、6世紀末から7世紀初頭のものとみられる二段に築造された前方後円墳である。墳丘表面には葺石がみられ、また、周堀も周囲の地割からその痕跡が認められる。埋葬主体部として、後円部に切石加工した角閃石安山岩を用いた全長9.4mの横穴式石室がある。また、前方部にも自然石乱石積みの全長8.76mの横穴式石室を持つ。総社地区一帯にみられる古墳群の中では最大規模であり、墳丘に構造を異にする2つの石室を持つ古墳として注目されている。



総社二子山古墳

キ 山王廃寺跡（史跡）

大正10年(1921)、総社町山王の日枝神社境内の松の根かたで、偶然、大きな礎石が発見された。この礎石は、表面に径65cmの柱受けの孔を持ち、その内部に径27cm・深さ30cmの舍利孔を持つ見事な「塔中心礎石」で、古代の寺院跡であることを示していた。その後、昭和54年(1979)の発掘調査により、塔の基壇の一辺の長さが17mであることが分かった。周辺か



塔心礎

らは、多数の瓦や根巻石、石製鴟尾が発見されており、全国的にも稀にみる豪壮・華麗な白鳳時代の古代寺院であったことが推察されている。

ク 岩神の飛石（天然記念物）

利根川の左岸に忽然とある周囲 70m、高さ 10m の巨岩で、岩神飛石神社のご神体となっている。昭和 13 年（1938）の指定当初は赤城山から流出した火山泥流中の流山が残存したものと考えられていたが、近年の調査の結果 4.2 万年前頃の浅間山噴火による溶岩と火砕流が、2.6 万年前頃に発生した浅間山の山体崩壊に伴う岩屑なだれによる前橋泥流によってもたらされたことが明らかになった。



岩神の飛石

②登録有形文化財・登録有形民俗文化財

登録有形文化財については、明治 35 年（1902）から昭和 29 年（1954）にわたる 14 か所 24 件があり、その内訳は、建築物 16 件、土木構造物 2 件、その他工作物 6 件である。登録有形民俗文化財は養蚕・製糸用具に係る 1 件である。

ア 群馬県庁本庁舎

昭和 3 年（1928）に建設され、平成 11 年（1999）まで県本庁舎として使用された建物である。平成 8 年（1996）には、県内初の登録有形文化財となった。早稲田大学の大隈講堂を設計した佐藤功一による設計の洋風建築物で、当時は最新鋭の建築であった。現在は「昭和庁舎」と呼ばれ、NPO・文化団体等の活動の場として利用されているほか、多数の映画やドラマのロケ地としても活用されている。前橋城址に建ち、当時を偲ばせる土塁や松と共に歴史的景観を形成し、市・県民のシンボルとして親しまれている。



群馬県庁本庁舎（昭和庁舎）

イ 群馬会館

昭和 5 年（1930）11 月に昭和天皇即位を記念し、公会堂の機能を持った産業会館として建設された。平成 8 年（1996）には、県内第 2 号の登録有形文化財となった。設計は群馬県本庁舎と同じ佐藤功一である。昭和初期の歴史的建造物であり、長年活用され親しまれている。



群馬会館

ウ 敷島浄水場（水道資料館、浄水場配水塔）

敷島公園に隣接する場所に位置し、水道資料館（旧浄水構場事務所）と浄水場配水塔（旧配水塔）が登録されている。いずれも前橋市
の水道施設が完成した昭和4年（1929）当時に造られたものである。
浄水構場の設計は野田俊彦、配水塔は金井彦三郎による。平成26年
（2014）年には土木学会選奨土木遺産に推奨され、現在も敷島公園の
シンボルとして親しまれている。



敷島浄水場
（左：水道資料館、右：浄水場配水塔）

浄水構場を設計した野田俊彦は、「建築非芸術論」を唱え、当時の建築界では構造派の立場をとっていた建築家であるが、その考えと対立したのが橋林寺（住吉町一丁目）の納骨堂を設計した中村鎮である。中村は「建築は科学の上に立つ芸術」とであると論じ、建築を美的に意匠することを重視する芸術派の立場にあった。両者の論争は「俊鎮論争」と呼ばれ、近代日本の建築史に名を残している。

エ 前橋カトリック教会聖堂

前橋カトリック教会は明治38年（1905）に天主教教会として設立された教会を前身としており、現在の聖堂は昭和7年（1932）に建てられた。鉄筋コンクリート造で、一部3階建てである。聖堂正面の左右に、下部四角、上部八角の尖塔を立ち上げた双塔形式である。



前橋カトリック教会聖堂

オ 前橋の養蚕・製糸用具及び関連資料

前橋市域で明治時代～昭和50年代まで使われた養蚕・製糸業に関する用具類や、国立原蚕種製造所から譲り受けた主に蚕種に関わる用具類を中心に構成され、総数は633点に及ぶ。蚕糸生産に関わる各工程で使う用具がほぼ網羅的に収集されており、かつて糸の町として栄えた人々の営みを今に伝える。



前橋の養蚕・製糸用具及び
関連資料

カ 萩原家住宅（主屋座敷、旧繭蔵）

萩原家は前橋市内で製糸業を営み栄えた家である。主屋及び座敷は屋敷地の正面中央に、旧繭蔵はその北東に建つ。主屋及び座敷は木造平屋建、瓦葺の小規模な建物であるが、西南隅に接客用の洋間をもつ質の高いつくりで、時代の流行をよく示す住宅建築である。旧繭蔵は製糸に用いる繭を納めた比較的大規模な土蔵で、良質の材を用いた丁寧なつくりになっている。付近一帯は製糸業で栄え、工場が立ち並んでいたが、現在は製糸関連の建物はほとんど失われており、地域一帯の歴史を物語るうえで貴重な存在である。



萩原家住宅

キ 上毛電気鉄道（大胡駅舎ほか）

上毛電気鉄道は昭和3年（1928）に営業を開始し、生糸のまち前橋から機業地桐生へ生糸を運び、絹産業の発展に大きく貢献した。大胡駅には開業時の施設が集中して残り、貴重な近代化遺産として、駅舎、電車庫、変電所などの施設が登録有形文化財になっている。



左：大胡駅舎

右：大胡駅電車庫

（2）県指定の文化財

群馬県指定の文化財は56件であり、種別で重要文化財38件（建造物8件、絵画13件、彫刻3件、工芸品8件、書跡1件、古文書1件、考古資料2件、歴史資料2件）、重要無形民俗文化財2件、史跡12件、名勝1件、天然記念物3件である。

① 旧蚕糸試験場事務棟（重要文化財）

明治45年（1912）に落成した国立原蚕種製造所前橋支所事務棟で、全国6か所に建設された国立原蚕種製造所のうち、唯一現存するものである。明治期の代表的な洋風木造平屋建の建造物であり、製糸業とともに歩んできた前橋の近代史を知るのに貴重な文化財である。大正3年（1914）には蚕業試験場となり、昭和12年（1937）には蚕糸試験場に改められた。昭和56年（1981）には、養蚕製糸の盛んなころの記念すべき建造物であるとして、県の重要文化財に指定されている。同年に敷島公園ばら園内に移築され、「生糸のまち前橋」の象徴とし、蚕糸記念館として開館した。



旧蚕糸試験場事務棟
（蚕糸記念館）

もともとは現在の群馬大学医学部附属病院の学生駐車場の敷地（昭和町三丁目）にあったものだが、昭和55年（1980）に筑波学園都市（茨城県）への移転が決定した際、周辺住民を中心とする関係者の尽力により、国から払い下げを受け、現在地に移築保存することとなった。本市の製糸業最盛期を象徴する数少ない建造物であることから、まちづくりへの活用が期待されている。

現在は、登録有形民俗文化財である「前橋の養蚕・製糸用具及び関連資料」の一部を展示し、一般公開されている。なお、養蚕・製糸用具及び関連資料の中には、平成16年（2004）に合併した粕川地区で収集された資料も含まれており、それらは粕川歴史民俗資料館に展示されている。

② 絹本著色親鸞聖人像（重要文化財）

親鸞ゆかりの寺・妙安寺が、徳川家康が創建させた東本願寺に親鸞自作の木彫壽像を譲り渡すにあたり拝領した什物の一つで、室町時代初期の作品と推定される。他にも、恩賞として贈られた数多くの書画・什物が残されている。



絹本著色親鸞聖人像

③膳城跡（史跡）

膳城跡は 兎川東岸の傾斜地に、南北約 500m、東西 250m の範囲に築かれ、本丸は城のほぼ中央に位置する。室町時代～戦国時代に、鎌倉幕府の重臣、三善康信の子孫とされる膳氏により築かれたと伝えられ、武田勝頼による「膳城素肌攻め」の伝承を持つ。本丸及び二の丸周辺の郭や堀跡などが非常に良好に遺存している。膳城主の子孫で、国务大臣を務めた膳桂之助氏は、城跡の中心部分を地主より買い上げて昭和 24 年（1949）に当時の粕川村に寄付し、この土地を中心とした本丸・二の丸部分が史跡に指定されている。



膳城跡

④船津伝次平の墓（史跡）

原之郷（富士見町原之郷）の農家に生まれた船津伝次平（天保 3 年（1832）～明治 31 年（1898））は、若い頃から学問に励み、和算の奥儀を究めるとともに農業技術の改良に努めた人物である。その功績が認められ、明治 10 年（1877）、内務卿大久保利通から任命を受けて、駒場農学校（現在の東京大学農学部）の教授となった。その後も、農商務省巡回教師となって全国各地を巡り、農業技術の普及に努めた。明治三老農の一人として「上毛かるた」などでも親しまれている。



船津伝次平の墓

⑤下長磯あやつり式三番 附 人形 3 個（重要無形民俗文化財）

下長磯の式三番叟は、毎年 4 月 14 日頃に下長磯町稲荷神社の拝殿で、五穀豊穰・村内安全の神事として奉納されている。開始時期は必ずしも明らかでないが、三番叟の頭の内側に架かれた安永 9 年（1780）の銘文からして、江戸時代中期にまでさかのぼるとされている。全国的にも例の少ない二人遣いの浄瑠璃系の人形（翁、千歳・三番叟）によって演じられる。



下長磯あやつり式三番の人形

⑥滝沢の不動滝（名勝）

赤城山の小沼から流れ出た粕川上流の標高 820m にある赤城山最大級の滝である。高さ 32m の絶壁から水が落下する様は実に雄大で、滝沢不動と共に修験道の信仰の対象となっている。



滝沢の不動滝

(3) 市指定の文化財

市指定の文化財は244件を数え、種別としては重要文化財141件（建造物60件、絵画8件、彫刻21件、工芸品21件、書跡9件、考古資料7件、歴史資料15件）、重要有形民俗文化財24件、重要無形民俗文化財21件、史跡45件、天然記念物13件がある。

① 旧関根家住宅（重要文化財）

養蚕のために正面中央部の屋根を切り上げた「赤城型」と呼ばれる屋根形式を持つ民家である。屋根は茅葺で、棟を「クレグシ」とする。養蚕に特化した農家建築を代表する建物で、県内でも数少ない文化財指定された「赤城型民家」である。建築の特徴から19世紀中頃の建築と推定される。飯土井町にあったものを大室公園内に移築復原された。



旧関根家住宅

なお、赤城型民家に特徴的な切り落とし造りの屋根は、屋根裏を養蚕に利用するための工夫の一つであり、蚕室面積の拡大のため発展したものである。こうした造りの民家が赤城南麓に多く分布していることから「赤城型民家」と呼ばれている。

② 埴輪 踊る男子像（重要文化財）

小さな帽子をかぶり、両手を上にして踊る男子像である。歌舞を演じる様子をかたどったものと推定されており、当時の人々の風習、信仰等を知るうえで貴重な資料である。出土地は五代町中原の小古墳で、6世紀後半頃の作と考えられる。



埴輪 踊る男子像

③ 春日神社太々神楽（重要無形民俗文化財）

上佐鳥町春日神社の太々神楽は、現在伝えられている座数（演目数）が20座あり、毎年5月の八十八夜に奉納される。そのうち「蚕の舞」では、軽快な笛や太鼓の音にのり、二人の下男と一組の夫婦が養蚕の様子を演じる。この舞は前橋周辺の養蚕習俗を劇的にまとめたもので、蚕の掃立て（孵化した蚕を移し広げる）、給桑（蚕に桑の葉を与える）、上簇（成熟した繭を簇に移す）、繭の収穫といった場面を舞う。



春日神社太々神楽

④ 牧野家墓地（史跡）

牧野氏の初代康成、康成の妻、及び康成の父である成定の妻の墓である。大胡城主であった牧野氏の菩提寺である養林寺の境内にある。



牧野家墓地

⑤前橋藩主酒井氏歴代墓地（史跡）

酒井氏は、初代重忠から9代忠恭に至る150年間前橋藩主を歴任し、続いて姫路藩主を6代務めた有力な大名である。酒井氏の菩提寺である龍海院の境内には、前橋藩主および姫路藩への転封後の歴代藩主なども含めて17基の墓があり、江戸時代の大名家墓地としての荘厳な雰囲気をかもしだしている。



前橋藩主酒井氏歴代墓地

⑥沼の窪のザゼンソウ（天然記念物）

ザゼンソウは、サトイモ科の湿地帯に生える多年草で、2月から3月にかけて花をつける。花の形が座禪を組む僧侶の姿に似ていることから、ザゼンソウと名付けられたと言われている。かつて牧場であった沼窪市有林内を流れる細ヶ沢川の源流沿いに長さ1,300mにわたり自生している。



ザゼンソウ

（4）主な未指定文化財

本市では、未指定の文化財についても、調査・研究を継続的に実施している。また、前橋市らしい良好な景観を作り出している建造物、樹木及び風景と視点場を「景観資産」として登録し、紹介するとともに保全に努めている。さらに、群馬県では、養蚕や製糸等の絹産業に関わる建造物や民俗芸能等を「ぐんま絹遺産」として登録している。主なものは次のとおりである。

①前橋駅前けやき並木通り（景観資産）

県道前橋停車場線のけやき並木は、戦災復興事業として植樹された。前橋駅前から国道50号まで歩くことで、オフィス群に溶け込んだケヤキの風景を連続して体験することができ、美しいシンボルロードとして市民に愛され続けている景観である。



けやき並木通り

②群馬大橋（景観資産）

利根川にかかる橋で、利根橋（明治32年）、大渡橋（大正10年）に次ぎ、昭和28年（1953）に市内で3番目に架けられた永久橋である。「群馬大橋」の名称は県民への公募により決定されている。現在、主要幹線道路の橋として一日5万台の車両が通行し、前橋中心市街地に通じる玄関口となっている。この橋と利根川、前橋市街地、遠く赤城山を望む景観は前橋市民のシンボリック景観となっている。



群馬大橋と利根川

③紺周郎神碓（ぐんま絹遺産）

利根郡片品村出身の養蚕家で、養蚕技術の改良と普及に尽力した永井紺周郎（天保7年（1836）～明治20年（1887））を称えた碑。紺周郎は妻いとともに「薪火育」法（いぶし飼い）を考案し、県内各地にその技術を伝えた。明治12、13年頃には勢多郡大胡町及び上大屋で養蚕指導を行った。特に上大屋は昔から養蚕の不作に苦しんでいたが、紺周郎らの教えを受けた後は毎年豊作となった。その報恩のため、明治21年（1888）に地元上大屋の人々だけでなく、宮城村、荒砥村、波志江村の人々まで参加して建立した神碓（石碑）とされる。



紺周郎神碓

④群馬県蚕糸技術センター（ぐんま絹遺産）

養蚕技術の発展のため、明治31年（1898）に設立した農事試験場蚕桑部を前身とし、数度の組織改正を経て、平成19年（2007）に蚕糸技術センターとなった。県内で唯一の蚕種製造を行う機関であり、近年では遺伝子組換えカイコ実用化研究、群馬オリジナル蚕品種の性状維持・蚕種製造等を行い、付加価値の高い蚕糸業を目指している。蚕の飼料となる桑畑を有しており、蚕糸業最盛期の農村部を想起させる。



群馬県蚕糸技術センター

（5）食文化

①粉食

群馬県は地理的条件から小麦づくりに適した土地であり、畑作や水田裏作の麦作が盛んに行われてきた。食生活においても麦類の比重が大きく、多様な粉食が生まれた。また産業としての製粉・製麺産業へと発展していった。

ア おっきりこみ

おっきりこみは、手打ちした小麦粉の無塩幅広麺を季節の野菜が入った汁の中に下ゆでせずに入れて煮込む料理である。のばした生地を麺棒に巻いたまま包丁で「切り込み」を入れるので、また麺を切っては入れ、切っては入れしたのでこの名前がついたといわれている。寝かす時間も下ゆでも不要であるため手早く作ることができ、農作業や養蚕で忙しかった農家の夕食の主食として頻繁に食された。塩を入れずに打った生麺を煮込むため、打ち粉が溶け出してとろみが出るのが特徴である。平成26年（2014）には「群馬の粉食文化・オキリコミ」として、群馬県の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択された。



おっきりこみ

イ 焼きまんじゅう

焼きまんじゅうは、まんじゅうを竹串に刺し、両面に甘辛い味噌を塗って焼いたものである。まんじゅうの原料は小麦であり、ドブロクを入れて発酵させた生地を蒸して作る。起源は江戸時代の末頃と言われ、古くは武士の腹みたしに、また、製糸工場で働く女性たちや農家の人々のおやつがわりにと、生活の中に浸透していった。専門店だけでなく、お祭りの屋台には欠かせない一品であり、現在もソウルフードとして広く市民に愛されている。



焼きまんじゅう

ウ おろしそば

製糸工場で働く^{こうじょ}工女等の食事は、日常的には米と麦を混ぜた飯と、朝夕は味噌汁、昼食には漬物という質素なものであった。そんな中、忙しい合間の楽しみとしてそばを食べていたと言われている。特に「おろしそば」は、工女等が「かけそば」ばかりの昼食だったことに見かねたそば屋の店主が、時^{とき}沢の大根をおろしてサービスとして乗せたことがはじまりと伝えられる。



おろしそば

②漬物

恵まれた自然環境から、本市ではたくさんの野菜がつくられ、種類豊富な漬物が作られてきた。^{たくあん}沢庵や梅干しなどの漬物は、製糸工場で働く工女たちの昼食としても食された。かつて漬物は家庭で作られるのが一般的であったが、戦後、軍需産業に代わる地場産業として発展に力を注がれた産業の一つが食品製造業であり、その中心となったのが漬物工場であった。伝統的な大根漬や梅干し、カリカリ梅、浅漬けなど幅広い品目が生産され、漬物の製造品出荷額は全国でも上位に入っている。



漬物

③豚肉料理

明治3年(1870)に日本で初めて器械製糸工場が作られた前橋市は、製糸業の繁栄によって大変好景気となった。西洋文化が盛んに取り入れられ"ハイカラ"な街であった前橋では、生糸で儲けた若旦那たちが流行りのカツライスやポークカレーなどを味わう、おしゃれで贅沢な西洋料理店が数多く軒を連ねた。その名残で、今でも豚肉料理を提供するお店が多く、とんかつ・ソースカツ丼・ホルモン・豚丼といった定番はもちろんのこと、各店が独自に作り出した創作豚肉料理も数多くある。現在も^{あかぎなんろく}赤城南麓地域では養豚が特に盛んであり、豚のブランド銘柄が多いのも特徴である。



ソースカツ丼

(6) 工芸品（木工品）

①家具

木製家具の生産は明治初期から続く本市の地場産業で、箱物（たんす類）と棚物（食器・書棚）を中心とした大衆家具製造に特色を持っている。大正時代には本市産の桐だんすが川越を経由して東京まで流通し、「川越簞笥」と呼ばれた。



桐だんす

②近代こけし

前橋市総社町を中心に「近代こけし」と呼ばれる創作こけしが生産されている。その起源は、明治時代後期、東京で修業した職人が前橋市総社町にロクロ工場¹を開業し、「総社玩具」と呼ばれる木製玩具が生産されるようになったことにある。近代こけしは、ボリュームのある肉付きとカラフルな線が入っている点が特徴である。



近代こけし

③木製楽器

戦後、市内の木工工場では、音楽教材として使用される教育用木琴の製造が行われるようになった。近年ではウクレレの生産も盛んに行われている。



ウクレレ

¹ ロクロ（回転式の工具）を設置した近代的な木工工場のこと。当時は足踏み式のロクロで、大変な労力と技術を要した。